

日田市埋蔵文化財調査報告書第14集

# 三和教田遺跡

1998年

日田市教育委員会



調査地点周辺の航空写真



調査地点の航空写真

## 序 文

近年日田市内では埋蔵文化財の発掘調査が急増し、小迫辻原遺跡や吹上遺跡といった貴重な遺跡が相次いで発見されています。

今回報告します三和教田遺跡は、住宅造成に伴い発掘調査を行った遺跡で、その調査結果をまとめたものであります。

調査では、多くの遺構や遺物が発見され、私達祖先の生活の痕跡を知ることができました。

本書が今後の郷土史解明のため、また文化財愛護の普及・啓発に、ご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたってご指導、ご協力を賜りました関係者の皆様方に対して、心より感謝を申し上げます。

平成10年3月31日

日田市教育委員会教育長 加藤 正俊

## 例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が日田市土地開発公社からの委託を受け、平成6年度に発掘調査を実施した三和教田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査では三和教田遺跡A区と呼称したが、本書から三和教田遺跡A地点と変更する。
3. 調査にあたっては、日田市土地開発公社や地元の全面的なご協力を得た。
4. 発掘調査は土居の指導のもと、主に森山が当たった。
5. 調査現場での遺構の実測は土居・松下・森山・佐藤が行い、遺物の実測および遺構・遺物の製図は土居が行った。
6. また、本書に使用した航空写真は(株)スカイサーベィに委託撮影したものを、遺物の写真は文化財写真家長谷川正美氏に撮影いただいたものである。
7. 出土遺物および図面等については、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
8. 本書作成にあたっては、坂本嘉弘（大分県教育委員会）・今田秀樹（天瀬町教育委員会）氏のご指導、ご助言をいただいたほか、小埜和美氏の手をわずらわせた。
9. 本書の執筆・編集は土居が行った。

# 本文目次

I	調査の経過	1
	(1) 調査に至る経過	1
	(2) 調査の経過	1
	(3) 調査組織	2
II	遺跡の立地と環境	3
	(1) 遺跡の位置と地形	3
	(2) 歴史的環境と周辺の遺跡	3
	(3) 三和教田遺跡の概要	5
III	調査の内容	6
	(1) 調査の概要	6
	(2) 1区の遺構と遺物	8
	(3) 2区の遺構と遺物	15
IV	まとめ	29

## 挿 図 目 次

第1図	三和教田遺跡周辺の主要遺跡分布図（1/25,000）	4
第2図	三和教田遺跡B地点出土の円面硯（1/2）	5
第3図	三和教田遺跡周辺地形図（1/5,000）	6
第4図	A地点調査区割付図（1/1,000）	7
第5図	1区遺構配置図（1/300）	7
第6図	1区1号土壌実測図（1/40）	8
第7図	1区1号土壌出土土器実測図（1/3）	8
第8図	1区2号土壌実測図（1/30）	9
第9図	1区3号土壌実測図（1/30）	9
第10図	1区3・5号土壌出土土器実測図（1/3）	9
第11図	1区4号土壌実測図（1/30）	9
第12図	1区5号土壌実測図（1/30）	9
第13図	1区6号土壌実測図（1/30）	9
第14図	1区6号土壌出土土器実測図（1/3）	10
第15図	1区7号土壌実測図（1/30）	10
第16図	1区8号土壌実測図（1/30）	11
第17図	1区8号土壌出土土器実測図（1/3）	11
第18図	1区9号土壌実測図（1/40）	12
第19図	1区10号土壌実測図（1/30）	12
第20図	1区11号土壌実測図（1/30）	12
第21図	1区11号土壌出土土器実測図（1/3）	12
第22図	1区12号土壌実測図（1/30）	12
第23図	1区13号土壌実測図（1/30）	13
第24図	1区13号土壌出土土器実測図（1/3）	13
第25図	1区14号土壌実測図（1/30）	13
第26図	1区15号土壌実測図（1/30）	13
第27図	1区16号土壌実測図（1/30）	13
第28図	1区16号土壌出土土器実測図（1/3）	13
第29図	1区出土土器実測図（1/3）	14
第30図	1区出土石器実測図（1/2）	14
第31図	2区遺構配置図（1/300）	15
第32図	2区1号土壌実測図（1/40）	16
第33図	2区1号土壌出土土器実測図（1/3）	16
第34図	2区2号土壌実測図（1/40）	17

第35図	2区2号土壙出土土器実測図 (1 / 3) .....	17
第36図	2区3号土壙実測図 (1 / 30) .....	18
第37図	2区4号土壙実測図 (1 / 30) .....	18
第38図	2区5号土壙実測図 (1 / 30) .....	18
第39図	2区6号土壙実測図 (1 / 30) .....	18
第40図	2区6号土壙出土土器実測図 (1 / 3) .....	18
第41図	2区7号土壙実測図 (1 / 30) .....	19
第42図	2区8号土壙実測図 (1 / 30) .....	19
第43図	2区9号土壙実測図 (1 / 30) .....	20
第44図	2区10号土壙実測図 (1 / 30) .....	20
第45図	2区11号土壙実測図 (1 / 30) .....	20
第46図	2区11号土壙出土土器実測図 (1 / 3) .....	20
第47図	2区12号土壙実測図 (1 / 30) .....	21
第48図	2区12号土壙出土土器実測図 (1 / 3) .....	21
第49図	2区13号土壙実測図 (1 / 30) .....	21
第50図	2区14号土壙実測図 (1 / 3) .....	21
第51図	2区14号土壙出土土器実測図 (1 / 3) .....	22
第52図	2区15号土壙実測図 (1 / 30) .....	22
第53図	2区16号土壙実測図 (11 / 40) .....	22
第54図	2区17号土壙実測図 (1 / 30) .....	23
第55図	2区18号土壙実測図 (1 / 30) .....	23
第56図	2区19号土壙実測図 (1 / 30) .....	23
第57図	2区19号土壙出土土器実測図 (1 / 3) .....	23
第58図	2区20号土壙実測図 (1 / 30) .....	23
第59図	2区21号土壙実測図 (1 / 30) .....	24
第60図	2区21号土壙出土土器実測図 (1 / 3) .....	24
第61図	2区22号土壙実測図 (1 / 30) .....	25
第62図	2区22号土壙出土土器実測図 (1 / 3) .....	25
第63図	2区23号土壙実測図 (1 / 30) .....	26
第64図	2区23号土壙出土土器実測図 (1 / 3) .....	26
第65図	2区24号土壙実測図 (1 / 30) .....	27
第66図	2区24号土壙出土土器実測図 (1 / 3) .....	27
第67図	2区25号土壙実測図 (1 / 30) .....	27
第68図	2区出土土器実測図 (1 / 3) .....	28
第69図	三和教田遺跡B地点の弥生時代主要遺構図 (1 / 800) .....	30
第70図	三和教田遺跡B地点の2号溝出土土器実測図 (1 / 3) .....	31



# 図 版 目 次

巻頭図版1 調査地点周辺の航空写真

2 調査地点の航空写真

図版1 (上) 1区の航空写真

(下) 1区の作業風景

図版2 (上) 1区10号土壌の発掘状況

(中) 1区11号土壌の発掘状況

(下) 1区13号土壌の発掘状況

図版3 1区6・8・11・13・16号土壌出土の遺物、1区の出土遺物

図版4 (上) 2区の航空写真

(下) 2区の作業風景

図版5 (上) 2区2号土壌の発掘状況

(中) 2区7号土壌の発掘状況

(下) 2区11号土壌の発掘状況

図版6 (上) 2区12号土壌の発掘状況

(中) 2区14号土壌の発掘状況

(下) 2区17号土壌の発掘状況

図版7 (上) 2区18号土壌の発掘状況

(中) 2区19号土壌の発掘状況

(下) 2区21号土壌の発掘状況

図版8 (上) 2区22号土壌の発掘状況

(中) 2区23号土壌の発掘状況

(下) 2区24号土壌の発掘状況

図版9 2区2・6・11・12・14・19・21号土壌出土の遺物

図版10 2区22～24号土壌出土の遺物、2区の出土遺物

# I 調査の経過

## (1) 調査に至る経過

平成5年8月に日田市土地開発公社事務局長より、日田市大字三和字教田2468-20ほか3筆における教田用地住宅譲渡事業に伴う埋蔵文化財有無の照会がなされた。

これを受けた市教育委員会では、1. 当該開発予定地が埋蔵文化財包蔵地である日田条里跡に該当し、2. 現地での分布調査を行ったところ、地形的にみて遺跡の存在する可能性が高いと想定されることから、その取り扱いについて市土地開発公社と数回の協議を重ね、事前の試掘調査を行うこととした。

試掘調査は、8月11日にバックホウ1台を使って、予定地に2ヶ所のトレンチを設定し、遺構の有無等の確認作業を行った。試掘調査では土壙などの遺構の検出と、弥生土器片や土師器などの遺物の出土があり、遺跡が存在することが明らかとなったため、再び市土地開発公社とその取り扱いについて協議を行った。

その結果、事業予定地の大半が工事変更等による遺跡の現状保存が困難な理由から、緑地予定地を除く場所を発掘調査することとなった。平成6年4月7日付け日開公第80号日田市土地開発公社理事長名による埋蔵文化財発掘の届出が提出され、平成6年4月19日付け教委文第207号大分県教育委員会教育長名にて発掘調査実施の通知が出された。

市教育委員会と市土地開発公社では発掘調査の期間や経費などについて打ち合わせを重ね、市土地開発公社の委託事業として市教育委員会が発掘調査を受託することでまとめ、調査に関する協議書および契約書を交わし、4月末より本格的な現場作業を行うこととなった。

発掘調査は事業造成予定面積4,957.81㎡のうち、緑地などで現状保存される箇所を除く約2,500㎡を発掘調査の対象とし、平成6年度に発掘作業、平成7年度に整理作業、平成8年度に報告書の発行を行う3ヶ年とした。

なお、報告書の刊行については、当初の平成8年度発行が市教育委員会の都合により平成9年度に変更した。

註) 試掘調査の概要は、日田市教育委員会発行『平成6年度日田市埋蔵文化財年報』(1996年)に報告。

## (2) 調査の経過

発掘現場での調査経過については、調査日誌にもとづき略述する。

4月27日／機械を使って表土のはぎ取りを行う。

さっそく多くの遺構が見つかる。

5月2日／この日より、作業員による遺構検出を始める。

連休後は雨の日があると水が溜まり、遺構検出も思うように進まず。

5月16日／調査区の割り付けと杭打ちを行う。

6月6日／この日より、本格的な遺構の掘り下げを開始する。

それでも、14日から29日までの間は雨天の日が多く、水中ポンプを使っての水抜き作業の日が続いた。

6月30日／平板測量や個別の遺構実測を行う。

この日より天候は良くなり、急ピッチで作業を進めるが、夏の陽射しが強く、思う

ように作業は進まず。

7月8日／遺構写真を撮影する。

7月13日／空中写真撮影を行う。

7月15日／器材を撤収し、予定より15日間遅れた現場作業を完了する。

調査終了後、埋蔵文化財発見届を提出し、平成6年8月23日付け教委文第1117号にて、埋蔵物の文化財認定を受ける。

### (3) 調査組織

平成6年度から平成9年度までの調査関係者は、下記のとおりである。

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤 正俊（日田市教育長）

調査事務 原田 良伸（文化課長）～平成8年3月31日

原田 俊隆（文化課長）平成8年4月1日～

財津寅日出（文化課課長補佐兼文化財係長）～平成8年4月14日

長尾 幸夫（文化課課長補佐兼文化財係長）平成8年4月15日～

森山 一宏（文化課主任）平成8年4月15日～

佐々木美保（文化課臨時職員）～平成8年3月31日

衛藤 和美（文化課臨時職員）平成8年4月1日～6月30日

竹原 里香（文化課臨時職員）平成8年7月1日～平成9年6月30日

調査員 土居 和幸（文化課主任）発掘調査担当

行時 志郎（文化課主任）試掘調査担当

吉田 博嗣（文化課主事）平成9年4月1日～

松下 桂子（文化課主事）

永田 裕久（文化課主事）平成7年4月1日～

森山敬一郎（文化課嘱託）発掘調査担当 ～平成9年3月31日

調査作業員 秋吉ミユキ・石井 貞美・石井トモ子・石橋 尚子・井上 秋吉・江藤 勝義

加納 健作・蒲地サチエ・北澤 幾子・酒井 光敏・佐藤 勝一・佐藤 洋子

坂元 登・清水 忠造・園田 光子・高村 次男・田中 昇・浜田 文義

浜地 幹造・平川 五男・毛利十四男・行村 豊・渡辺芳五郎

整理作業員 宇野 富子・黒木千鶴子・富田 仁美

## Ⅱ 遺跡の立地と環境

### (1) 遺跡の位置と地形

今回調査を行った三和教田遺跡A地点は、日田市大字三和字教田2468-20番地に所在する。

日田市は大分県の西部に位置し、福岡県との県境をなしている。九州最大河川である筑後川の上流にあたることから、古代より北部九州の文化の影響を強く受け栄えてきた。江戸時代には天領として西国筋郡代が置かれ、九州島にあっては政治・経済の中心的な役割を担っていた。

現在市域の大半は山林が占め、西流する三隈川（筑後川）を中心に市街化しており、平成2年の大分自動車道開通が道路網の整備や住宅開発等を促進し、盆地の様子も大きく様変わりしてきている。遺跡はこうした新たな開発の波が押し寄せつつある花月川中流域沿いに存在する。

この花月川は三隈川（筑後川）の支流の一つで、盆地北部の国見山（860m）と大将陣山（909.8m）の間を源とし、西流して小野川と合流し、さらに南流して有田川と合流し盆地西部で三隈川に注いでいる。この川を溯ると、中津・宇佐などの旧国豊前へと通ずる。

遺跡はこの花月川中流域の左岸、標高約110m前後の低丘陵上に位置する。遺跡の立地する場所は、標高75～90mを中心とする沖積面（盆地）と、その外側にあたる標高120～200mの台地面の中間地形にあたる。遺跡のすぐ脇を花月川に沿うように国道212号が走るが、この道路面とは約10m近い比高差がみられる。こうした盆地内での低丘陵上の地形は、「低位段丘1面」と呼ばれ、市内ではこの花月川流域のほかにも高瀬川や内河野川といった盆地南部の河川流域に顕著にみられる地形面で、すでにそのような場所には惣田遺跡や手崎遺跡など遺跡の存在が知られている。

しかしながら、このような「低位段丘1面」は限られた範囲にしかなく、どちらかといえば花月川流域沿いの地形は沖積面と「中位段丘1面」と呼称される沖積地との比高差10～30mの崖面を形成する台地地形が主体をなしている。なかでも、花月川左岸域には通称山田原と呼ばれる発達した台地が展開しており、台地上には大規模な集落が営まれ、崖面には無数の横穴墓が築かれている。

### (2) 歴史的環境と周辺の遺跡

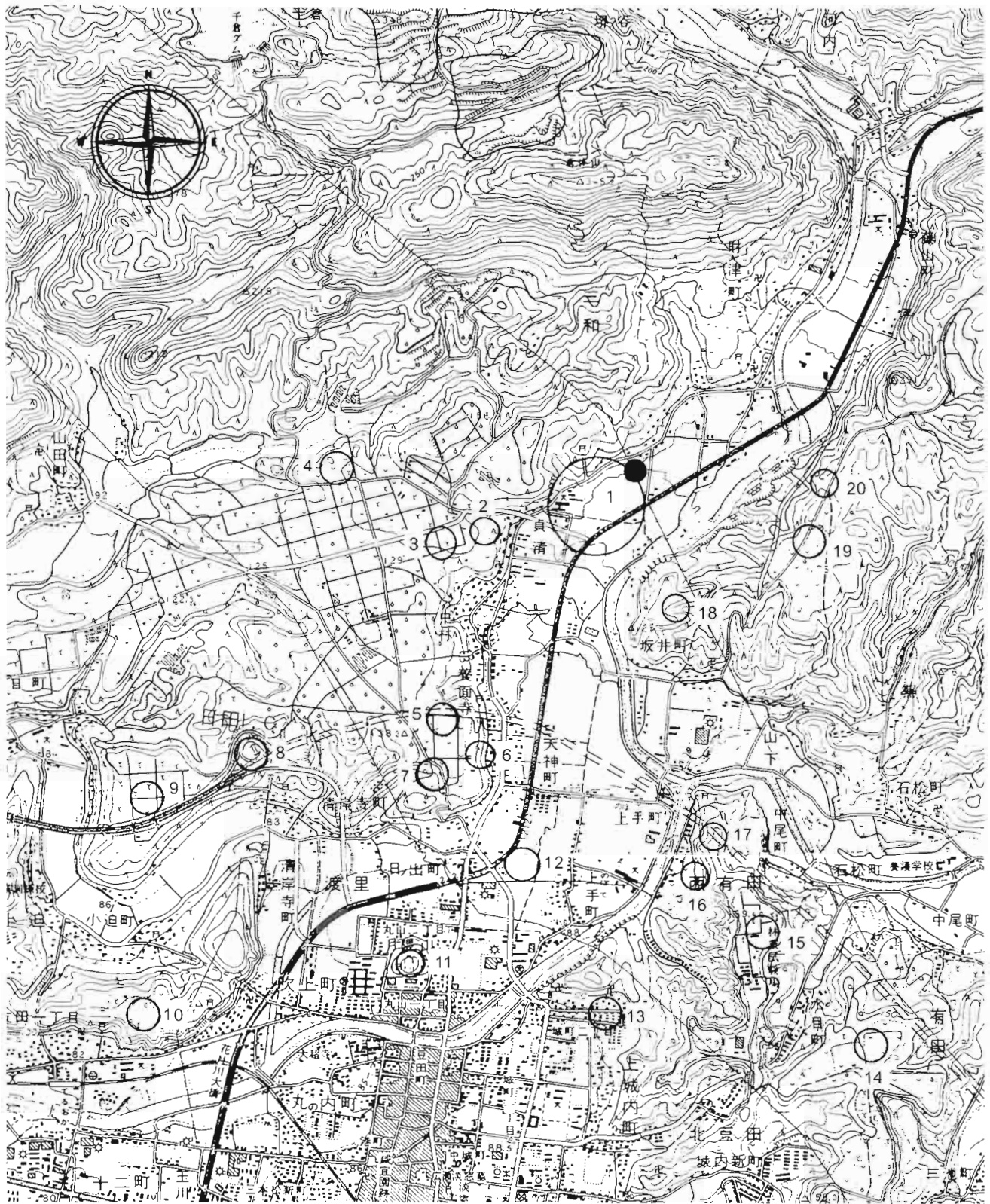
遺跡周辺は、現在三和・花月と呼ばれる地域にあたる。古代日田郡にあっては、この地域一帯には、尾坪・大坪・栗ヶ坪といった条里関連地名が多く残ることから、奈良時代の条里地割りの推定がなされている。

中世期には花月川右岸にあたる慈眼山を拠点とした郡司大蔵氏が日田の地を支配するが、末期になると大友氏支配へと変わり、八奉行と呼ばれる大蔵氏の一族朗徒8名に委ねる郡老体制をとる。その一人、財津氏が拠点としていたのが、この地域である。

次に周辺の遺跡をみると、まず花月川を挟んで葛原遺跡がある。台地上に立地する遺跡で、過去の調査では弥生時代前期から中期の竪穴住居跡・土壙、古墳時代後期の竪穴住居跡、中世の溝や掘立柱建物などが発掘されている。同台地上には葛原古墳などの古墳も散在する。

遺跡の背後にあたる山田原台地上には弥生時代集落である用松原遺跡や谷ノ久保遺跡、三和教田遺跡を見下ろす台地縁辺部には用松中村古墳が存在する。用松原遺跡では弥生土器の採集例があり、谷ノ久保遺跡は弥生時代前期の土壙などが発掘されている。

このほか、遺跡南側の花月川両岸には大規模な遺跡が点在している。左岸の山田原台地上には、弥生時代中期から後期の竪穴住居跡・掘立柱建物・石棺墓など、奈良時代の掘立柱建物、中・近世



- |           |           |              |            |
|-----------|-----------|--------------|------------|
| 1. 三和教田遺跡 | 6. 羽野横穴墓群 | 11. 月隈横穴墓群   | 16. 夕田横穴墓群 |
| 2. 用松中村古墳 | 7. 草場第1遺跡 | 12. 日田条理上手地区 | 17. 夕田古墳   |
| 3. 用松原遺跡  | 8. 草場第2遺跡 | 13. 慈眼山遺跡    | 18. 縫ヶ迫古墳群 |
| 4. 谷ノ久保遺跡 | 9. 小迫辻原遺跡 | 14. 中尾原遺跡    | 19. 葛原遺跡   |
| 5. 後迫遺跡   | 10. 吹上遺跡  | 15. 佐寺原遺跡    | 20. 葛原古墳   |

第1図 三和教田遺跡周辺の主要遺跡分布図(1/25,000)

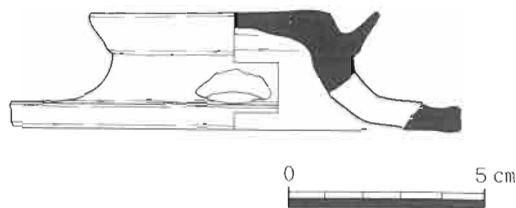
の墓などが発掘された後迫遺跡<sup>註8)</sup>がある。

近接しては方格規矩鏡片が発見された草場第1遺跡、台地斜面には5世紀後半から8世紀の横穴墓が発掘された羽野横穴墓群<sup>註9)</sup>が存在する。

これらの遺跡の東側にあたる沖積面では、日田条里内において古墳時代前期に比定される竪穴住居跡や土壙などが調査されている。

さらに、花月川と有田川の合流地点付近の台

地上には、弥生時代中期から後期の竪穴住居跡・貯蔵穴・掘立柱建物などが発掘された佐寺原遺跡<sup>註11)</sup>、その崖面には5世紀後半から7世紀後半まで営まれた夕田横穴墓群<sup>註12)</sup>などの遺跡が存在する。



第2図 三和教田B地点出土の円面硯(1/2)

### (3) 三和教田遺跡の概要

さて、三和教田遺跡であるが、これまでに県・市教委による3次にわたる調査が実施されている。簡単にB・C地点の調査概要をまとめると、まずB地点については平成6年に市教委が調査を行い、旧石器時代のナイフ形石器、弥生時代後期中頃～後半の環濠・竪穴住居跡・掘立柱建物、古墳時代の溝・竪穴住居跡・掘立柱建物、中世期の建物など各時代の遺構や遺物が発掘されている。

こうした資料のうち、弥生時代後期中頃～後半の環濠は、断面逆台形の幅が5～6.5mと規模が大きな濠を弧状に巡らす市内でも数少ない環濠集落で、該期の拠点集落の様子がうかがえる。また、古墳時代後期の溝の埋土からは、第2図に示す小型の円面硯が出土している。7世紀後半から8世紀前半にあたることから、官衙的な施設が存在していた可能性がある。

C地点はB地点の南にあたり、その調査報告によれば、縄文時代後期から晩期、弥生時代中期初頭の遺構などが確認されている。とくに、花月川の旧河道とされる自然流路からは県下では最大級の土偶や木製品が出土しており、さらには縄文土器や石器を伴う小溝なども発見され市内では数少ない縄文時代集落の一端が判明している。

註1) 千田 昇 「日田・玖珠地域の地形」『日田・玖珠地域—自然・社会・教育—』大分大学教育学部 1992年

註2) 土居和幸・行時志郎編 『惣田遺跡』日田市教育委員会 1994年

註3) 田中裕介編 『日田市高瀬遺跡群の調査1』大分県教育委員会 1995年

註4) 註1)に同じ。

註5) 西別府元旦 「第1章古代」『日田市史』日田市 1990年

註6) これまでに市教育委員会が4次の発掘調査を実施。

註7) 土居和幸・森山敬一郎 「谷ノ久保遺跡」『平成6年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1996年

註8) 友岡信彦 「後迫遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報2・3』大分県教育委員会:1992・1993年

註9) 渋谷忠章・吉武学編 『日田市羽野横穴墓群発掘調査概報』大分県教育委員会 1985年

註10) 友岡信彦 「日田条里遺跡群」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6)』大分県教育委員会 1997年

註11) 松本康弘 「佐寺原遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報1』大分県教育委員会 1991年

註12) 友岡信彦 「夕田横穴墓群」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報4』大分県教育委員会 1994年

註13) 吉田博嗣編 『三和教田遺跡C地点』大分県教育委員会 1997年

### Ⅲ 調査の内容

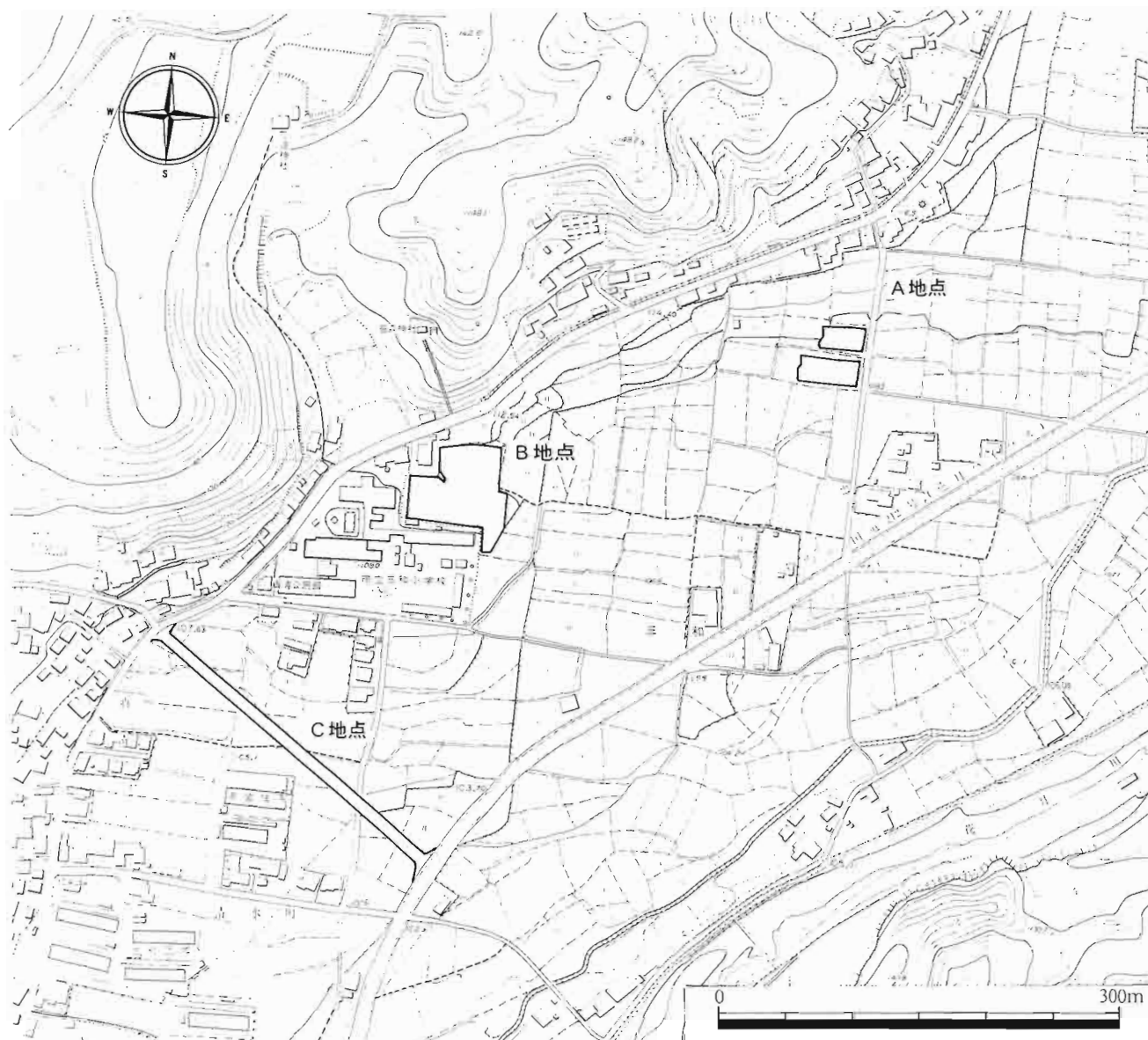
#### (1) 調査の概要 (第3・4図)

今回発掘調査の対象となったA地点は、B地点の北西300mの場所にあたる。

調査では市道を挟んで調査区が分かれることから、北側を1区、南側を2区とした。調査区中心での標高は108mを測り、1区から2区にかけて緩やかに傾斜している。比高差は約1.3mである。調査において検出した遺構は、1区が土壇65基と小ピット2、2区は土壇52基と小ピット2である。土壇のなかには柱穴と思われるものもあるが、床面の状況や建物の存在が想定できないことから、土壇として取り上げている。なお、とくに小さいものについては、小ピットとした。

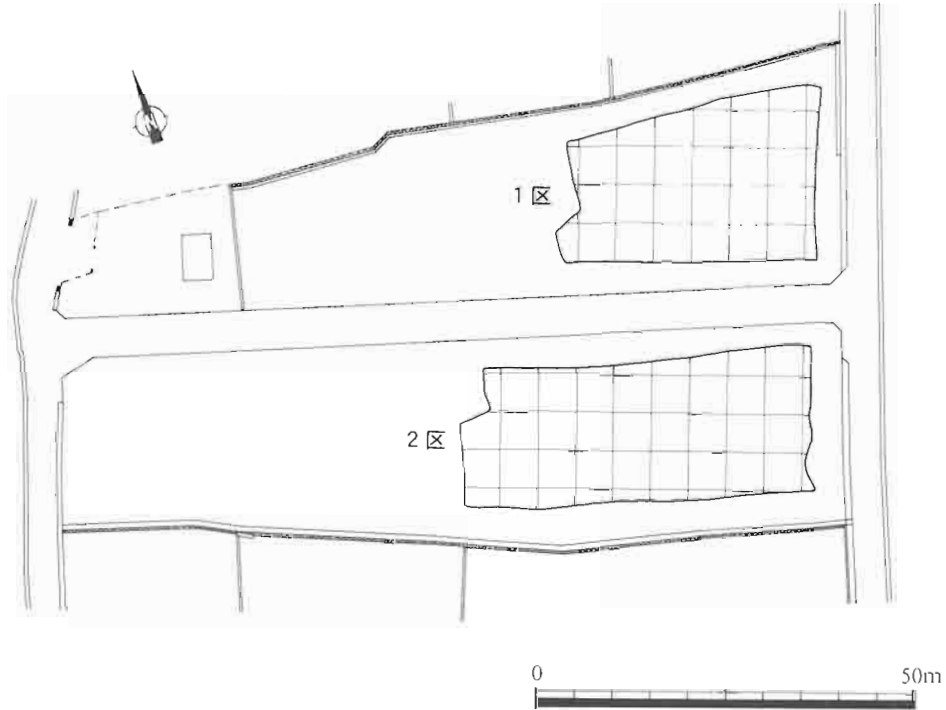
また、調査区の1・2区とも地山は白色のシルト層が主体を占めるが、1区の西南隅付近には粘り気のある明茶褐色層、2区の東側付近には川砂層が部分的にみられた。

遺構の埋土にはあまり大差が認められず、大きく6つの堆積にわかれる。1. 白色シルト層 (地山土)、2. 明茶褐色土層 (地山土) + 白色シルト層、3. 黒色土層 + 川砂層 (地山土)、4. 白色シルト層 + 川砂層、5. 黒色土層 + 灰色土層、6. 川砂層である。このほか、2と4の上下堆積も

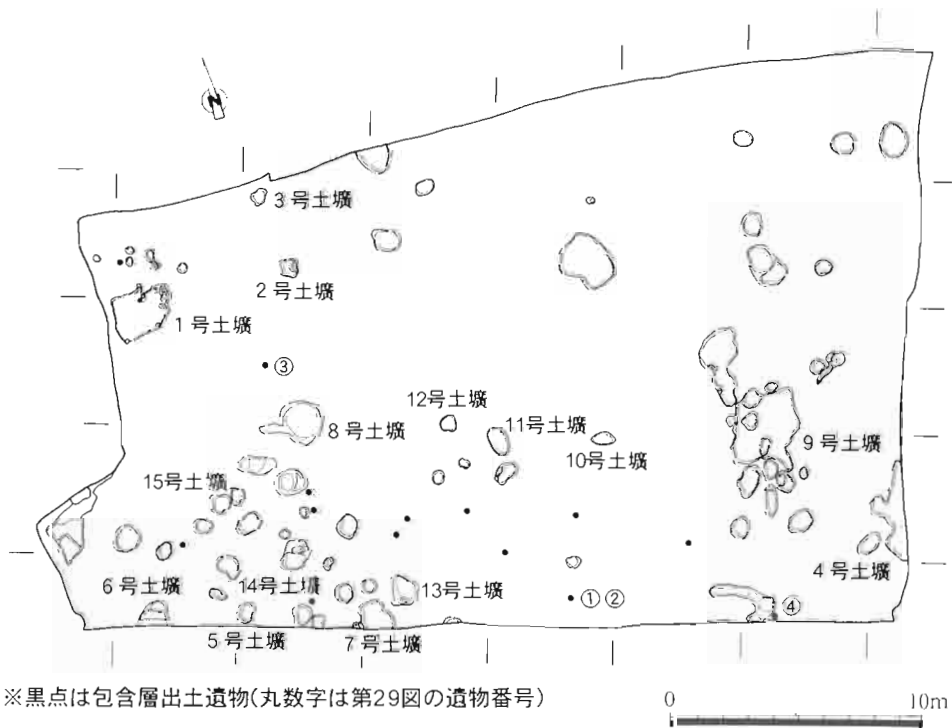


第3図 三和教田遺跡周辺地形図(1/5,000)

認められる。これらのうち、少なくとも5の埋土の遺構については近世遺構の所産と考えられる。本文中での遺構の説明では、1～6層として表現する。1区の発掘調査面積は1.030㎡、2区の発掘調査面積は1.320㎡である。以下、主に遺物の出土した土壌にしばって報告する。



第4図 A地点調査区割付図(1/1,000)



第5図 1区遺構配置図(1/300)



## (2) 1区の遺構と遺物 (第5図)

### 1号土壙 (第6図)

不定形な土壙で、床面は平坦でなく起伏にとんでいる。土壙内側には20cm程度の小ピットが存在する。規模は長軸2.34m、短軸1.70m、深さ20~30cmである。埋土は3層。

### 出土遺物 (第7図)

器台である。受部の径8cm。内面に指頭痕が残る。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内外面とも淡褐色。焼成は良好。このほかに、内外面にハケ調整、外面に粗いタタキが残る土器片が共伴している。

### 2号土壙 (第8図)

ほぼ円形な土壙である。規模は長軸0.76m、短軸0.71m、深さ31cmを測る。遺物は出土していない。埋土は1層。

### 3号土壙 (第9図)

不定形な土壙である。風化礫がまとまって出土した。規模は長軸0.66m、短軸0.52m、深さ12cmを測る。埋土は3層。

### 出土遺物 (第10図-1)

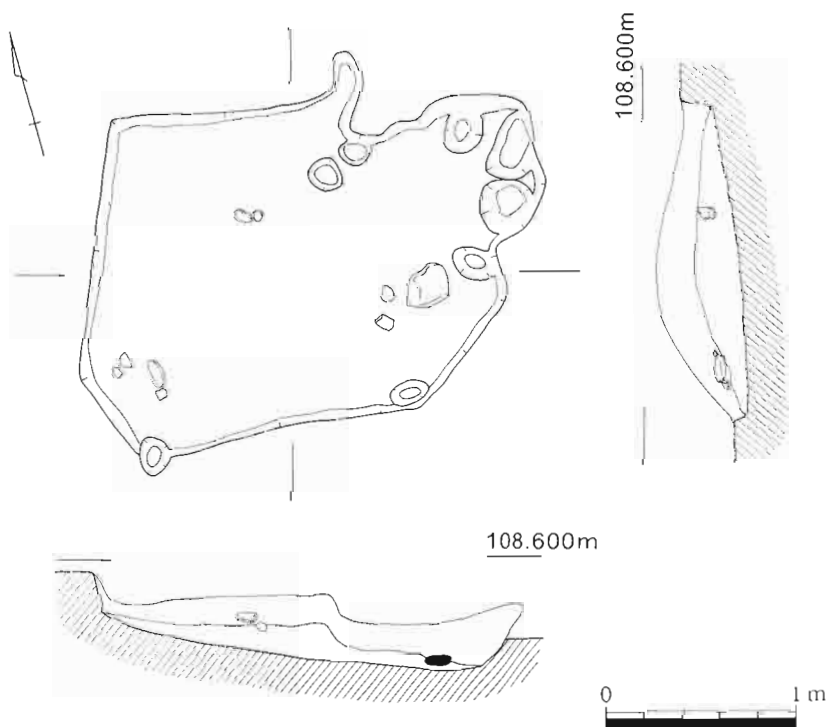
白磁皿である。乳白色の釉がかかり、口縁部は外半する。法量は口径10.4cm。

### 4号土壙 (第11図)

楕円形を呈する土壙である。規模は長軸1.01m、短軸0.59m、深さ12cmを測る。遺物は出土していない。埋土は1層。

### 5号土壙 (第12図)

ほぼ円形な土壙である。規模は長軸0.76m、短軸0.61m、深さ20cmを測る。遺物は小片が出土している。埋土は2層。

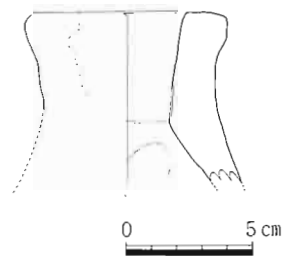


第6図 1区1号土壙実測図(1/40)

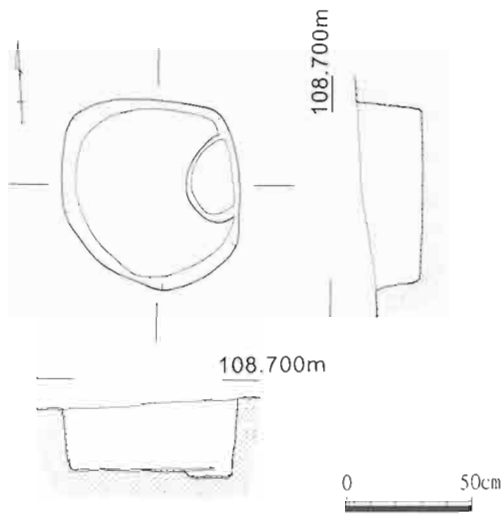
いる。埋土は2層。

### 出土遺物 (第10図-2)

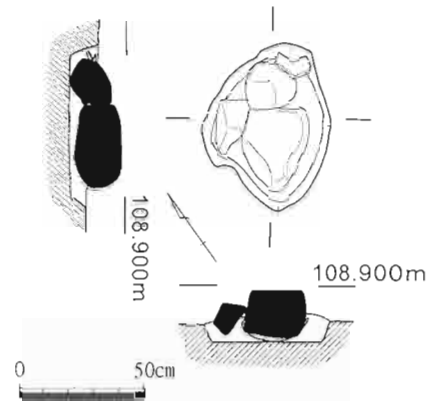
甕の底部で、レンズ底をなす。底径3.6cm。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内面が淡黒褐色、外面が淡褐色。焼成は良好。



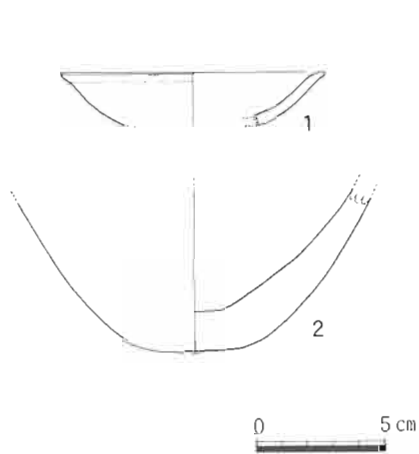
第7図 1区1号土壙出土土器実測図(1/3)



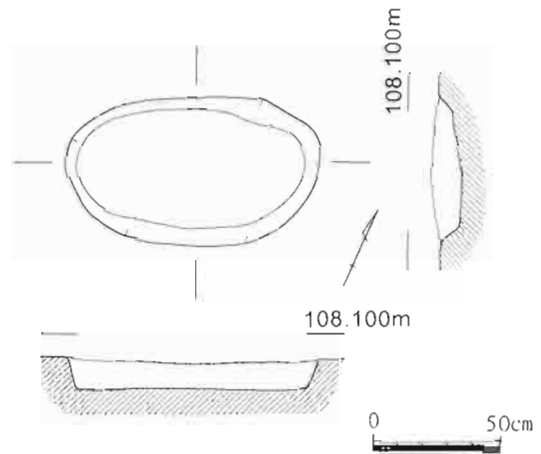
第8図 1区2号土坑実測図(1/30)



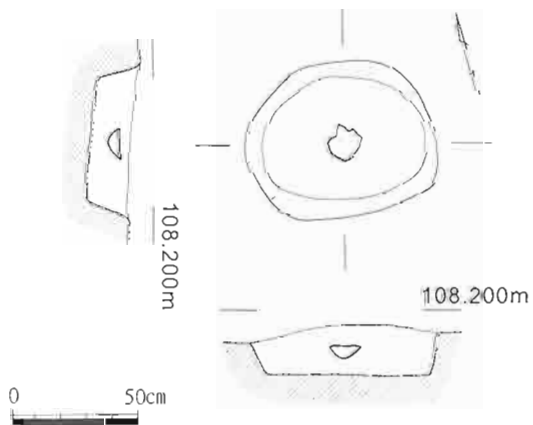
第9図 1区3号土坑実測図(1/30)



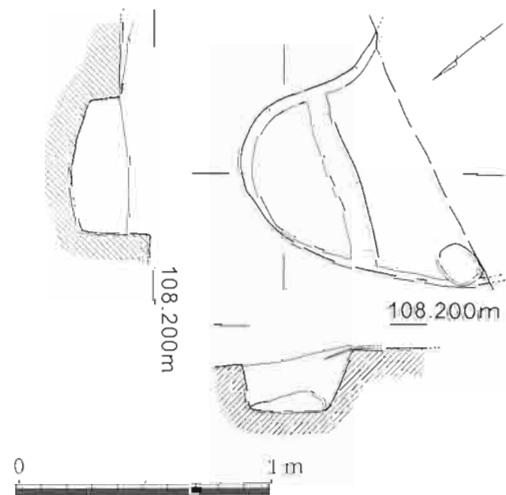
第10図 1区3・5号土坑出土土器実測図(1/3)



第11図 1区4号土坑実測図(1/30)



第12図 1区5号土坑実測図(1/30)



第13図 1区6号土坑実測図(1/30)

6号土壙（第13図）

不定形な土壙の一部である。床面は2段掘りをなす。規模は長軸1.03m +  $\alpha$ 、短軸0.70m +  $\alpha$ 、深さ24cmを測る。遺物は図示した程度しか出土していない。埋土は2層。

出土遺物（第14図）

壺の底部で、丸みをおびた平底をなす。底径5.9cm。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内面が淡黒褐色、外面が淡褐色。焼成は良好。

7号土壙（第15図）

不定形な土壙である。床面は起伏にとんでいる。規模は長軸1.59m、短軸1.12m、深さ4～24cmを測る。内外面にハケが残る土器片が出土している。埋土は2層。

8号土壙（第16図）

ほぼ円形な土壙である。床面は平坦でなく起伏にとんでいる。規模は長軸1.68m、短軸1.60m、深さ8～30cmを測る。遺物は土器片が少量出土している。埋土は2層。

出土遺物（第17図）

甕であるが、球形の胴部中央付近で打ち欠き碗状をなす。底部は丸底。内面ナデ仕上げ。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内外面とも淡褐色。焼成は良好。

9号土壙（第18図）

不定形な土壙で、床面は起伏にとんでいる。規模は長軸1.52m、短軸1.09m、深さ2～10cmを測る。遺物は外面にハケが残る土器片が出土。埋土は4層。

10号土壙（第19図）

楕円形を呈する土壙である。規模は長軸0.88m、短軸0.52m、深さ60～90cmを測る。遺物は内外面にハケが残る土器片が出土している。埋土は1層。

11号土壙（第20図）

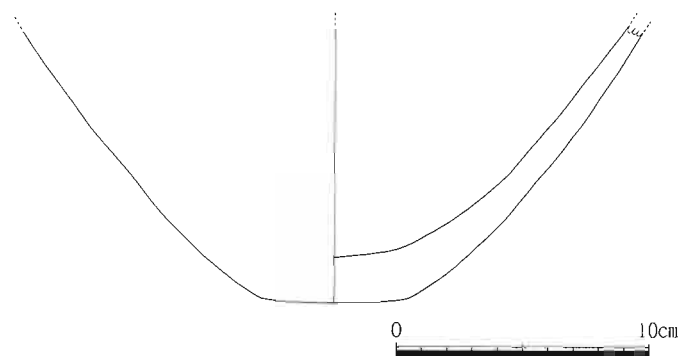
楕円形を呈する土壙である。規模は長軸1.14m、短軸0.64m、深さ14cmを測る。埋土は2層。

出土遺物（第21図）

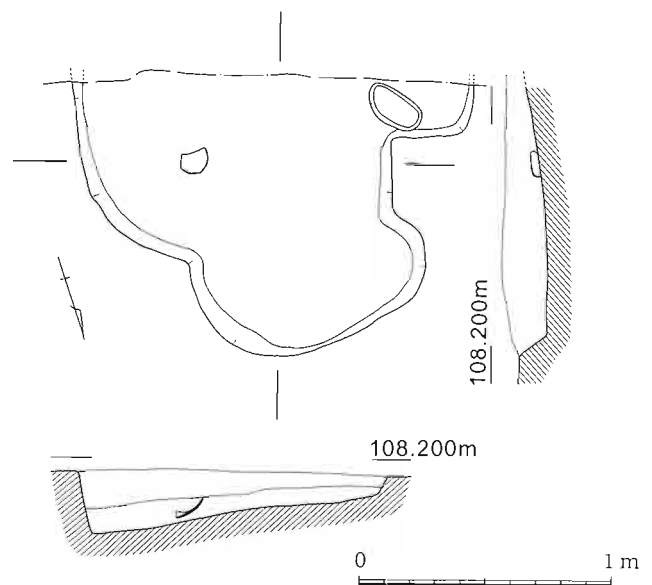
鉢である。胴部は球形をなし、口縁端部は平坦に仕上げる。内面はタタキ後ハケ。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内外面ともが淡灰色。焼成は良好。

12号土壙（第22図）

不定形な土壙である。規模は長軸0.62m、短軸0.62m、深さ10cm。遺物は出土していない。埋土は1層。



第14図 1区6号土壙出土土器実測図(1/3)



第15図 1区7号土壙実測図(1/30)

### 13号土壙 (第23図)

不定形な土壙である。規模は長軸1.13m、短軸1.04m、深さ15cmを測る。埋土は2層。

### 出土遺物 (第24図)

壺の底部で、丸みをおびた平底をなす。内面はハケ。底径7cm。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内面とも淡灰色。焼成は良好。このほか、外面に粗いタタキが残る土器片が出土している。

### 14号土壙 (第25図)

不定形な土壙である。規模は長軸0.95m、短軸0.79m、深さ5cmを測る。遺物は外面に粗いタタキが残る土器片が出土している。埋土は1層。

### 15号土壙 (第26図)

円形を呈する土壙である。規模は長軸0.75m、短軸0.68m、深さ16cmを測る。埋土は4層。

### 16号土壙 (第27図)

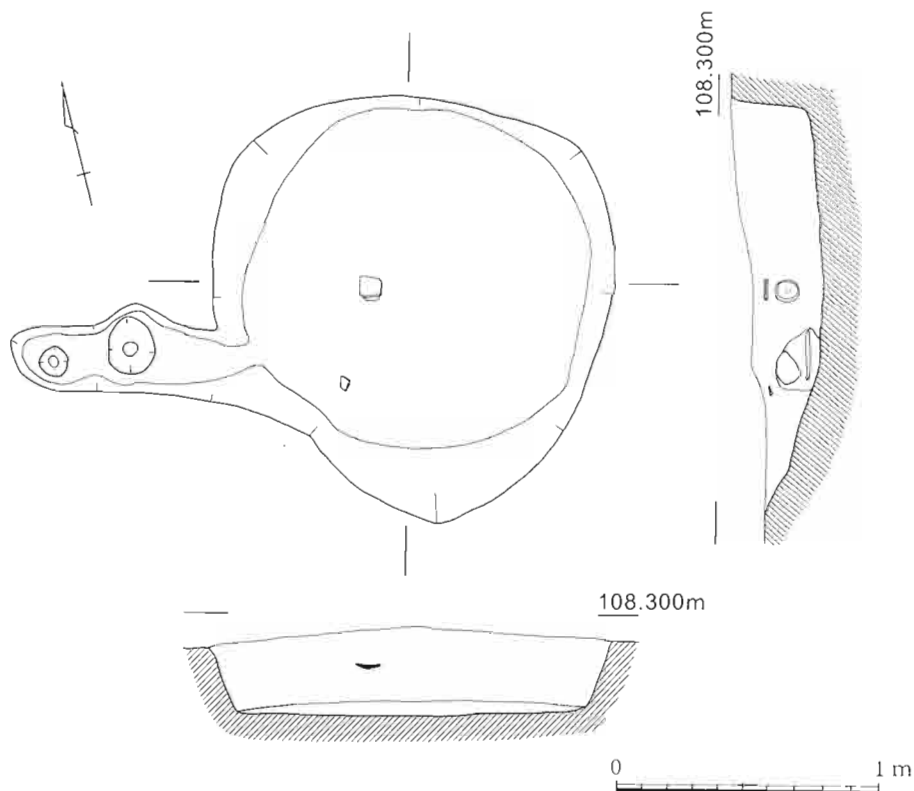
楕円形を呈する土壙で、床面は2段掘りである。規模は長軸1.12m、短軸0.92m、深さ21cmを測る。埋土は4層。

### 出土遺物 (第28図)

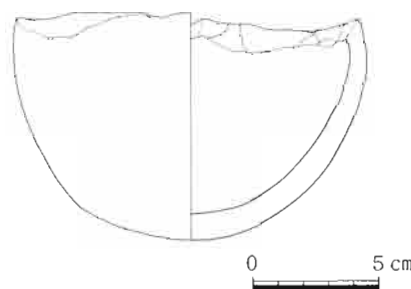
甕の底部で丸底をなすが、わずかにレンズ底のなごりが残る。内外面ともハケ調整。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内面が淡灰色、外茶褐色。焼成は良好。

### 1区出土土器 (第29図)

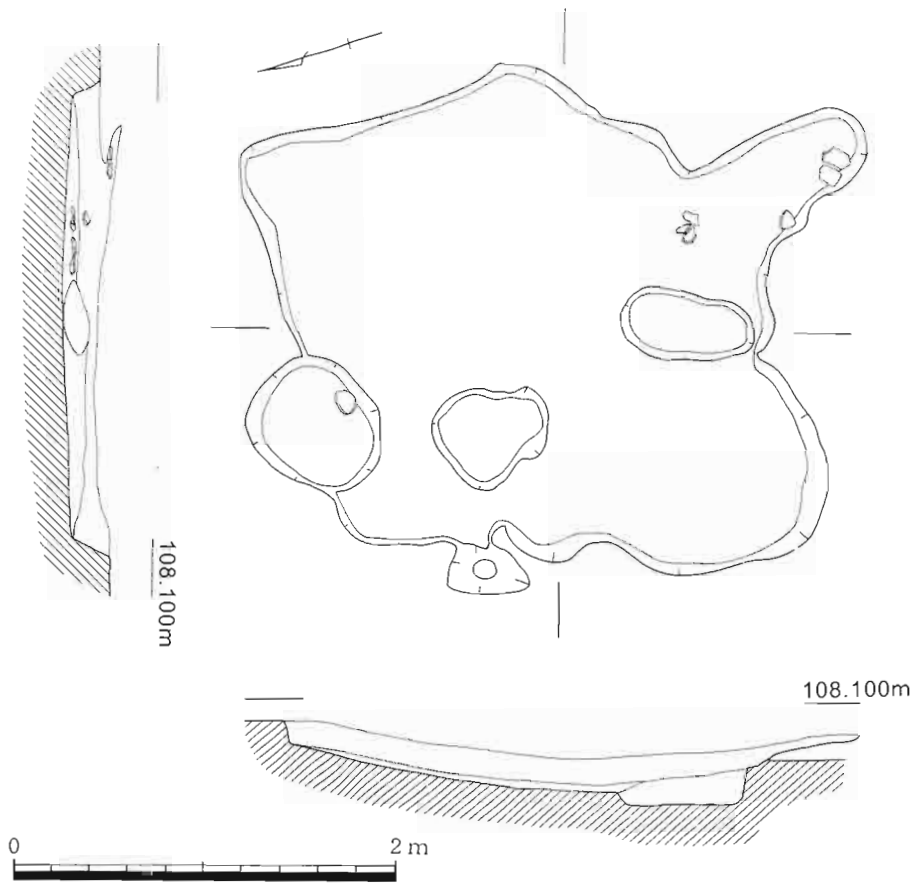
1・2は同一個体の甕である。口縁部は逆L字形をなし、口縁下に1条の沈線を巡らす。底部は上げ底。内面はナデ、外面はハケ。頸部の内外面に指頭痕が残る。復元口径23.5cm、復元底径7.5cm。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内外面とも淡灰白色～暗茶褐色。焼成は良好。3は甕である。口縁は「く」字状に外反し、端部内側を跳ね上げる。頸部に短い三角突帯を巡らす。復元口径22.2cm。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内外面とも淡黄白色。焼成は良好。4は短頸壺である。胴部は球形をなし、短い口縁部はわずかに外反し、頸部内面に指頭痕が残る。復元口径15.1cm。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内面が淡茶褐色、外面が淡黄白色。焼成は良好。1～4とも白色シルト層出土。



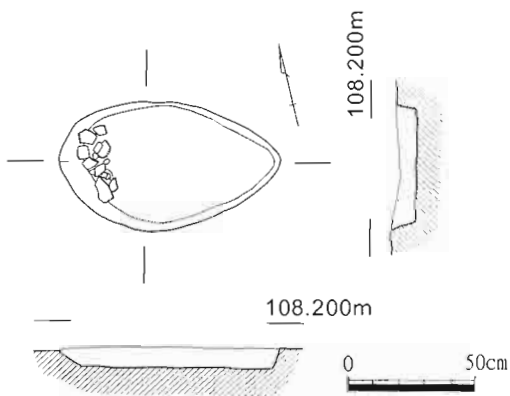
第16図 1区8号土壙実測図(1/30)



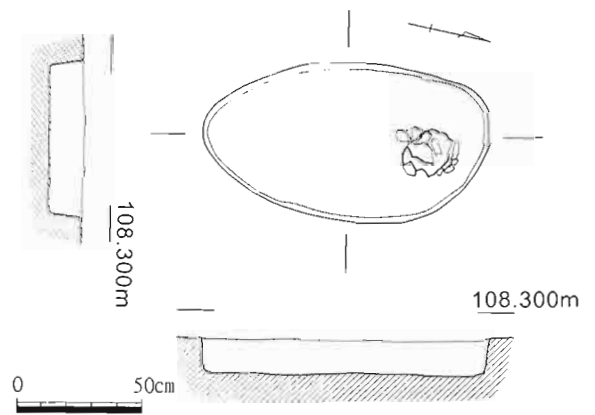
第17図 1区8号土壙出土土器実測図(1/3)



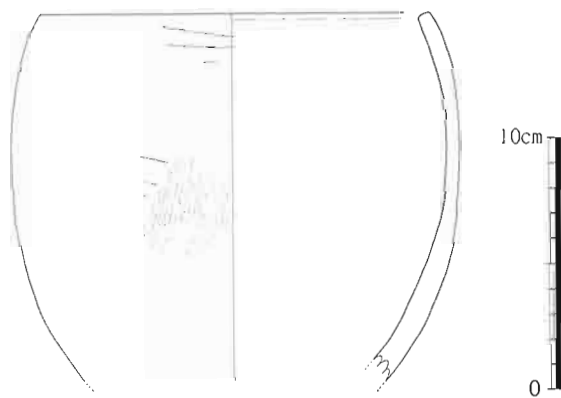
第18图 1区9号土壤实测图(1/40)



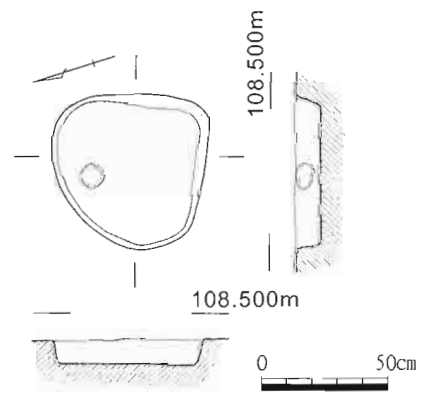
第19图 1区10号土壤实测图(1/30)



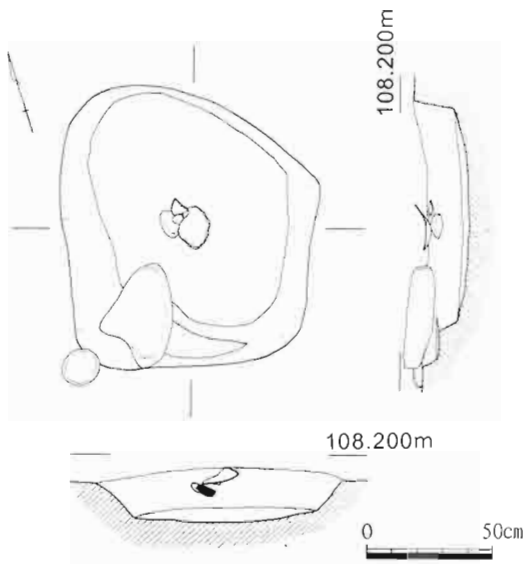
第20图 1区11号土壤实测图(1/30)



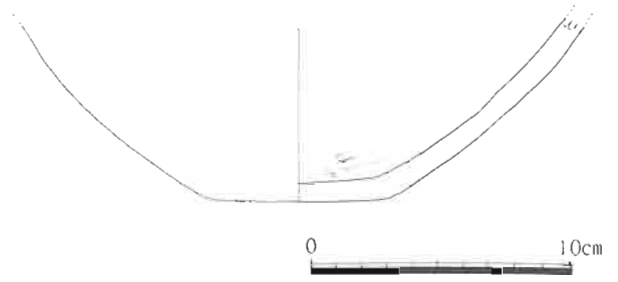
第21图 1区11号土壤出土土器实测图(1/3)



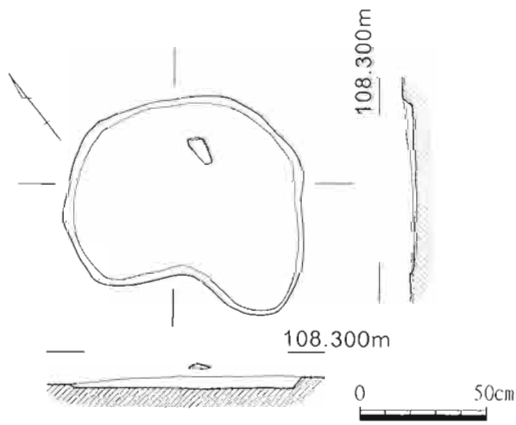
第22图 1区12号土壤实测图(1/30)



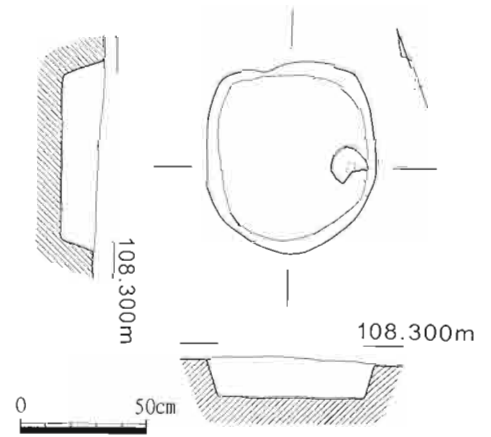
第23图 1区13号土壙实测图(1/30)



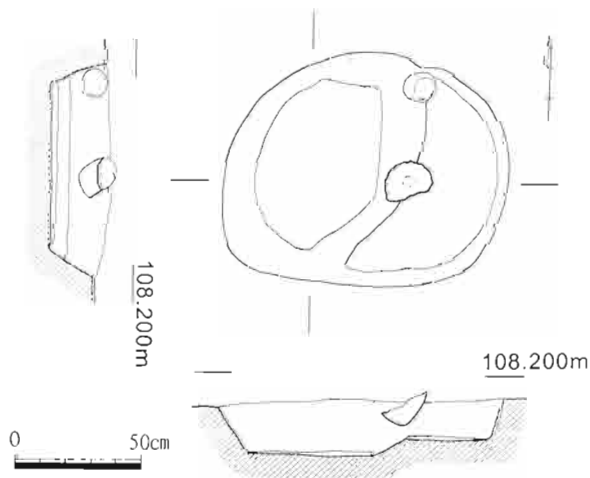
第24图 1区13号土壙出土土器实测图(1/3)



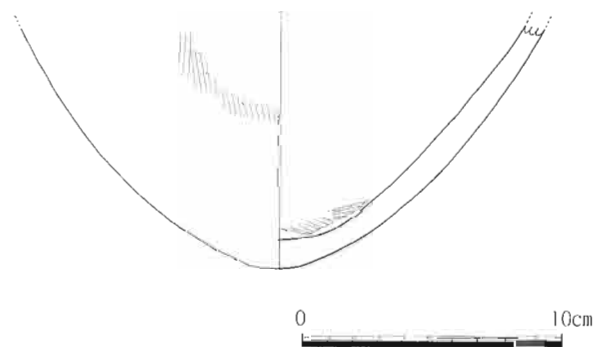
第25图 1区14号土壙实测图(1/30)



第26图 1区15号土壙实测图(1/30)



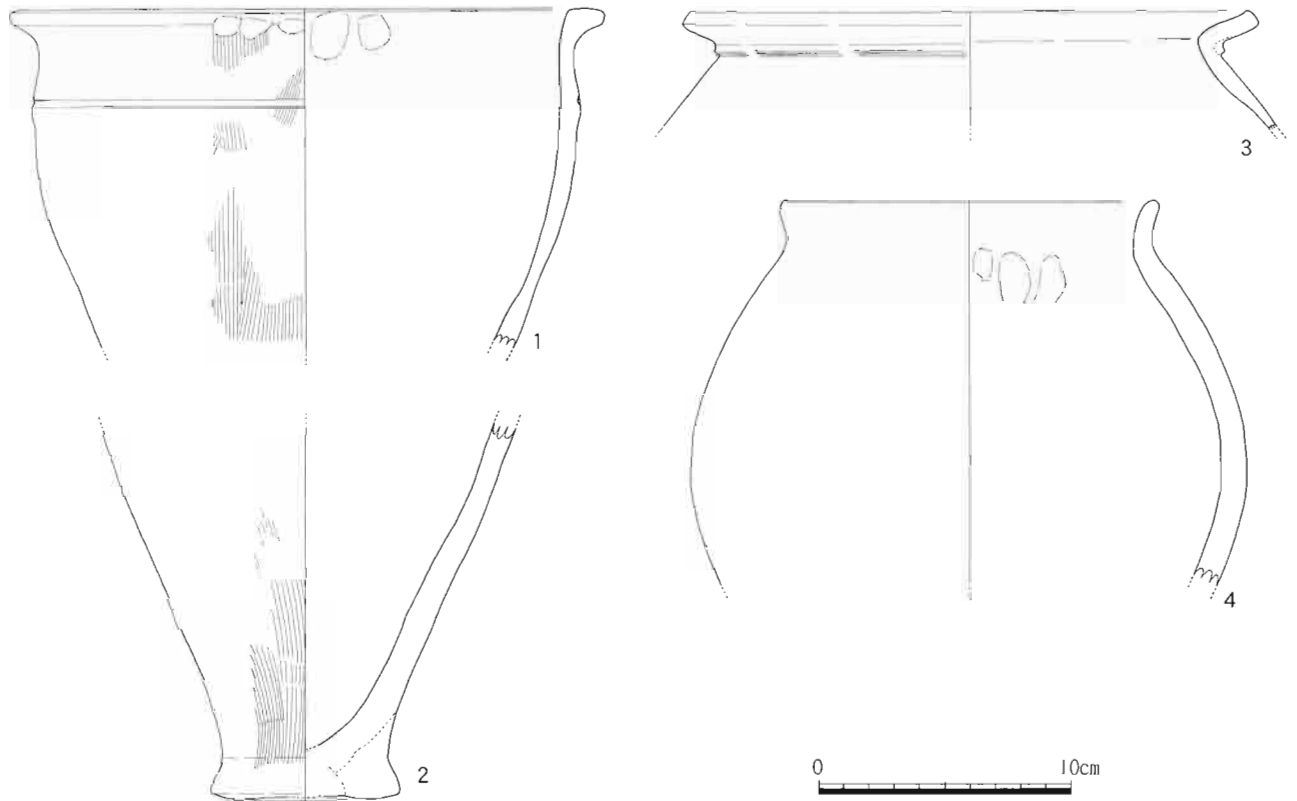
第27图 1区16号土壙实测图(1/30)



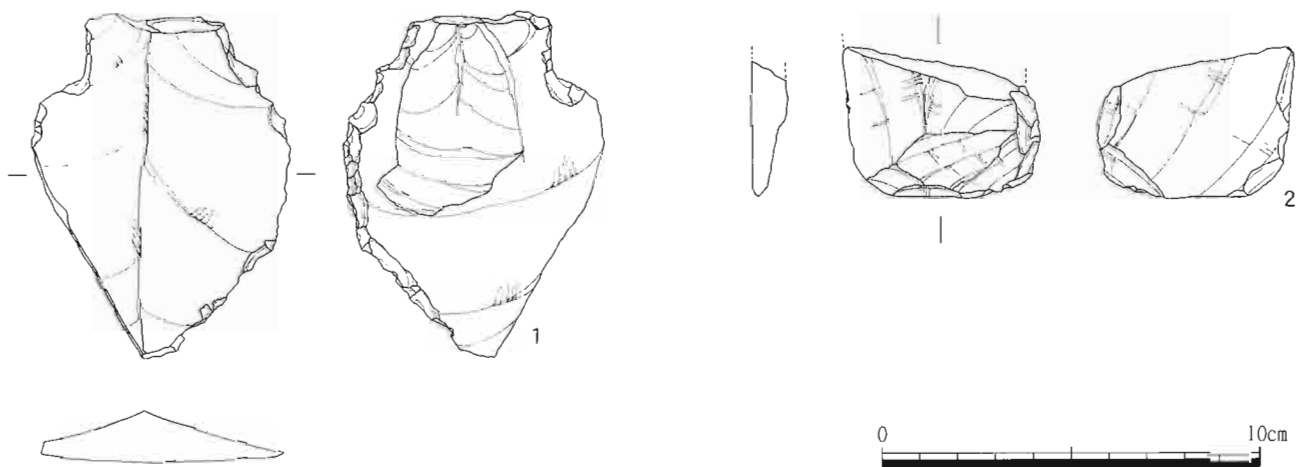
第28图 1区16号土壙出土土器实测图(1/3)

1区出土石器（第30図）

1はスクレイパーである。縦長剥片を素材とし、ポジ面左縁辺部を中心に2次加工を施す。安山岩製。最大長9cm、最大幅6.8cm、最大厚1.5cm。2は小形の打製石斧である。縁辺部を簡単に加工し、仕上げる。結晶片岩製。残存長3.7cm、残存幅5.1cm、残存厚1.1cm。いずれも一括品。



第29図 1区出土石器実測図(1/3)



第30図 1区出土石器実測図(1/2)

### (3) 2区の遺構と遺物 (第31図)

#### 1号土壙 (第32図)

不定形な土壙である。調査段階では竪穴住居跡と考えられたが、埋土の状況や土柱穴がないことから土壙として報告する。規模は長軸3.45m、短軸2.80m、深さ20cm前後である。埋土は1層。

#### 出土遺物 (第33図)

1は鉢である。胴部は半球形をなし、口縁端部は水平に仕上げる。内面はハケ、外面はタタキ後ナデ。口径23.5cm。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内面が灰白色、外面が黄褐色。2は甕の底部で、レンズ底をなす。内外面ともハケ調整。底径は19~29cm。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内外面とも灰白色。1・2とも焼成はやや良好。このほか、内外面にハケ調整が残る土器片なども出土している。

#### 2号土壙 (第34図)

不定形な土壙である。規模は長軸4.35m、短軸1.16~2m、深さ12~35cmを測る。埋土は1層。

#### 出土遺物 (第35図)

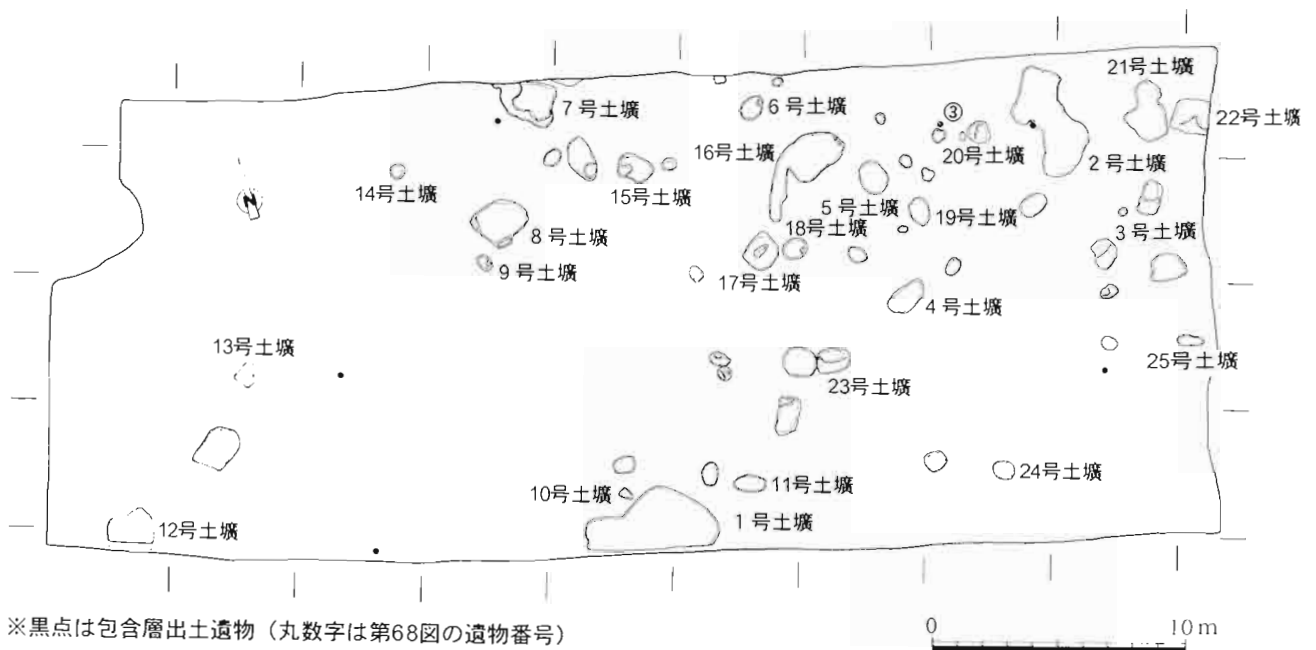
1・2は同一個体の甕である。口縁部は直線的に外反し、底部はレンズ底で内面に指頭痕が残る。色調は内面が灰白色、外面は茶褐色。口径16.2cm、底径2.8cm。3も甕である。1同様口縁部が直線的に外反する。色調は内面が灰茶色、外面は黒褐色。口径16.9cm。両者とも内外面にハケ調整が残り、胎土は角閃石、石英、長石を含む。焼成は良好。

#### 3号土壙 (第36図)

不定形な土壙である。床面は起伏がみられ、2段掘りをなす。規模は長軸1.14m、短軸0.95m、深さ6~18cmを測る。出土遺物に外面ハケ調整が残る土器片が出土している。埋土は1層。

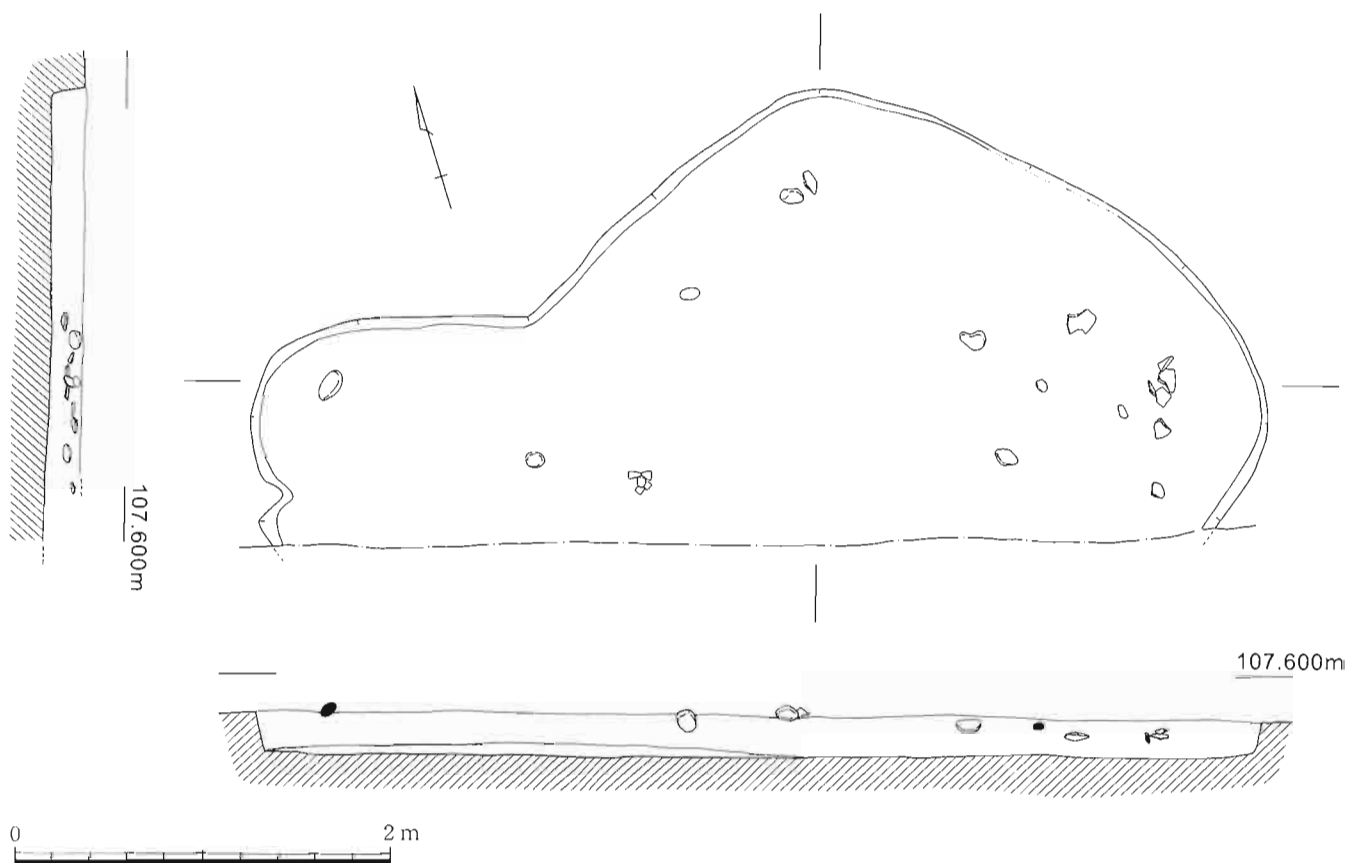
#### 4号土壙 (第37図)

楕円形を呈する土壙である。規模は長軸1.66m、短軸0.89m、深さ16~28cmを測る。内外面にハケ



第31図 2区遺構配置図(1/300)





第32図 2区1号土壙実測図(1/40)

調整が残る土器片が出土している。埋土は1層。

5号土壙 (第38図)

不定形な土壙である。規模は長軸1.36m、短軸1.02m、深さ4~15cmを測る。遺物の出土はない。埋土は6層。

6号土壙 (第39図)

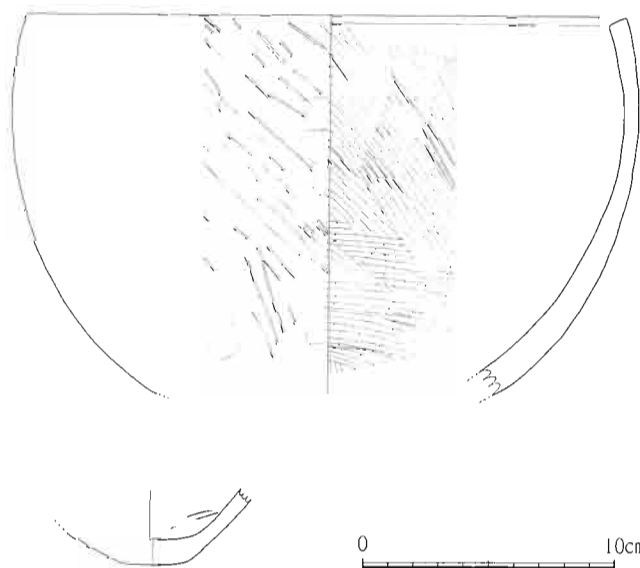
楕円形を呈する土壙である。内部にはピットあり。規模は長軸1.01m、短軸0.77m、深さ19~30cmを測る。遺物は外面にハケ調整が残る土器片が出土している。埋土は6層。

出土遺物 (第40図)

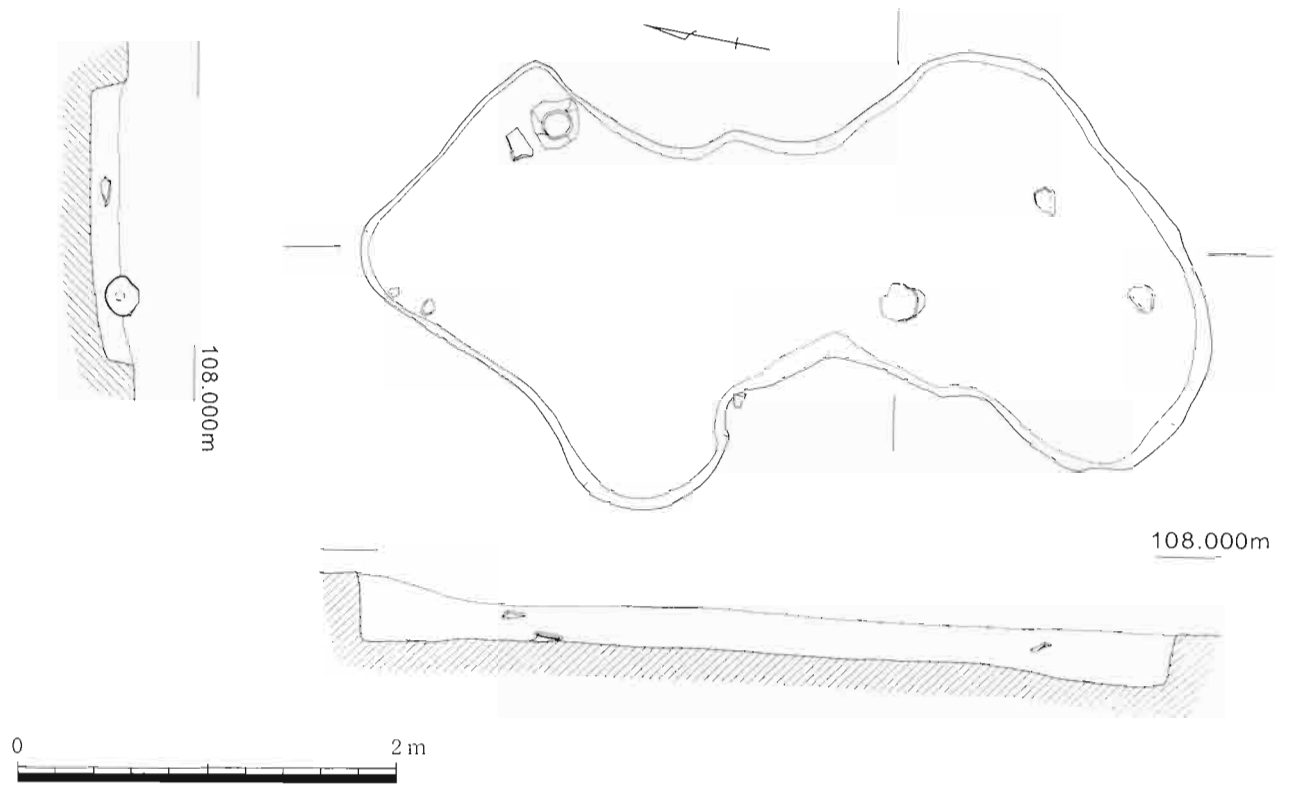
甕の底部であろう。レンズ底をなす。底径3cm。調整不明。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内外面とも茶褐色。焼成は良好。

7号土壙 (第41図)

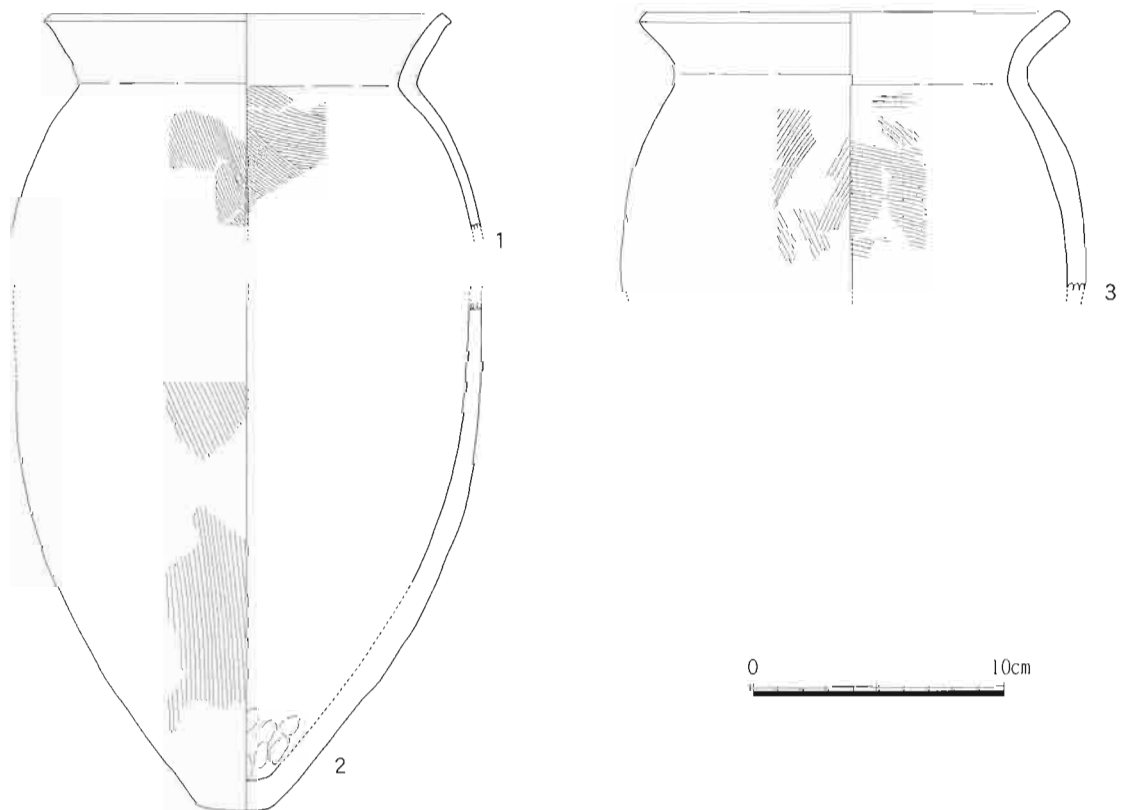
不定形な土壙である。床面は起伏があり、2段掘りをなす。規模は長軸2.20m+ $\alpha$ 、短軸1.30~



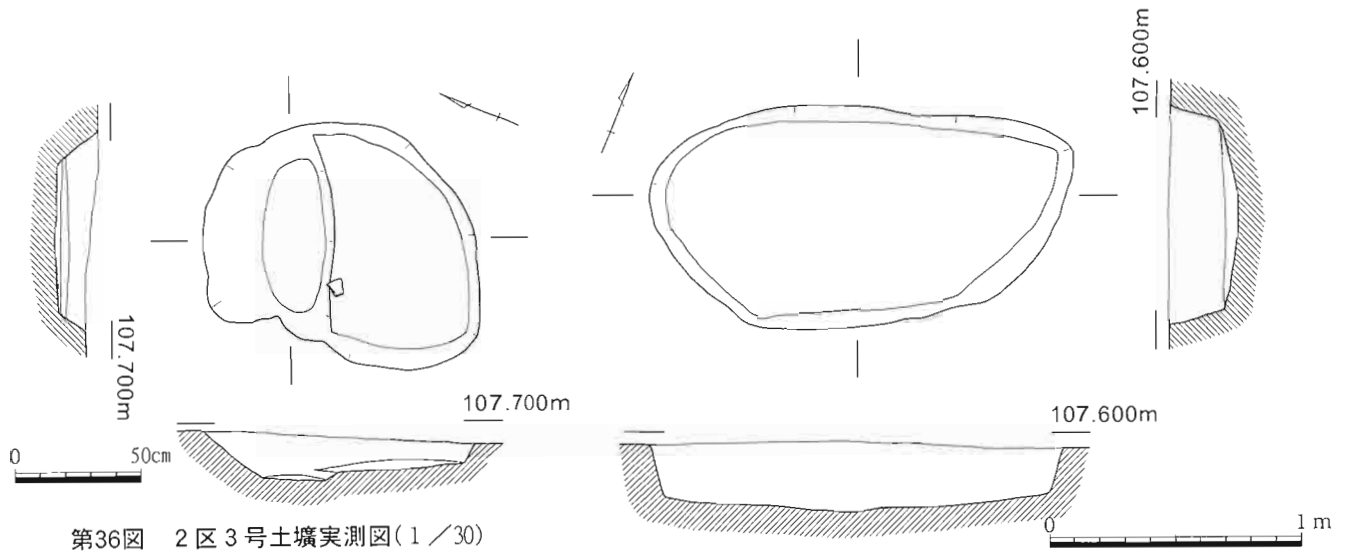
第33図 2区1号土壙出土土器実測図(1/3)



第34图 2区2号土坑实测图(1/40)

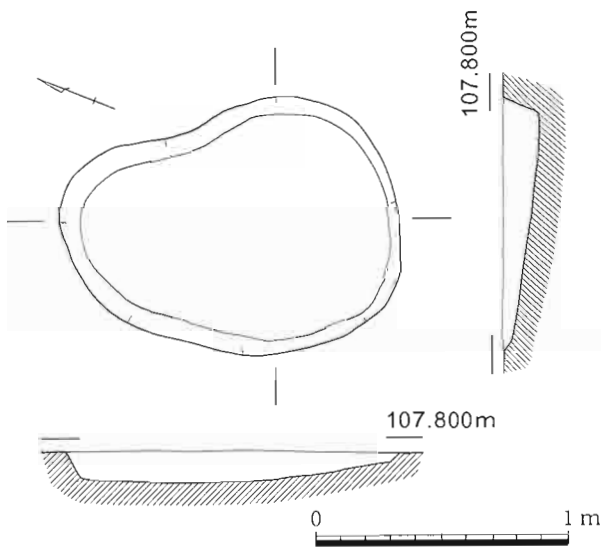


第35图 2区2号土坑出土土器实测图(1/3)

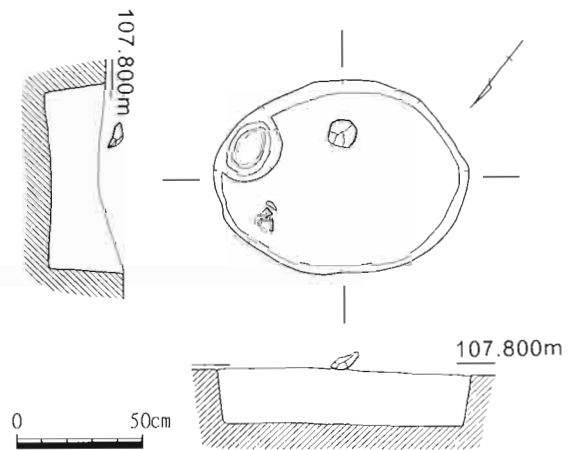


第36図 2区3号土坑実測図(1/30)

第37図 2区4号土坑実測図(1/30)



第38図 2区5号土坑実測図(1/30)



第39図 2区6号土坑実測図(1/30)

1.84m、深さ11~33cmを測る。遺物は河原石に混じって、内外面にハケ調整や外面に粗いタタキが残る土器片などが出土している。埋土は6層。

8号土坑(第42図)

不定形な土坑である。床面は平坦でなく起伏にとんでいる。規模は長軸1.91m、短軸1.70m前後、深さ14~30cmを測る。遺物は外面に粗いタタキ痕が残る土器片などが出土している。埋土は6層。

9号土坑(第43図)

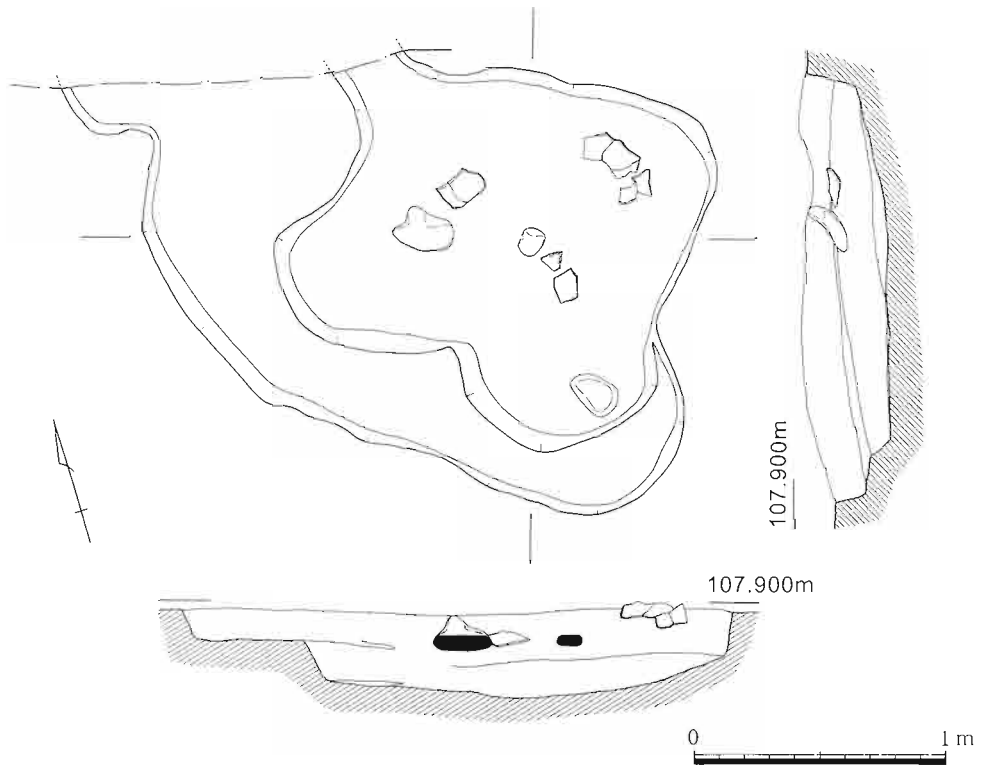
楕円形を呈する土坑である。床面は2段掘りをなす。規模は長軸0.67m、短軸0.45m、深さ12~21cmを測る。遺物は外面にハケ調整が残る土器片が出土している。埋土は6層。

10号土坑(第44図)

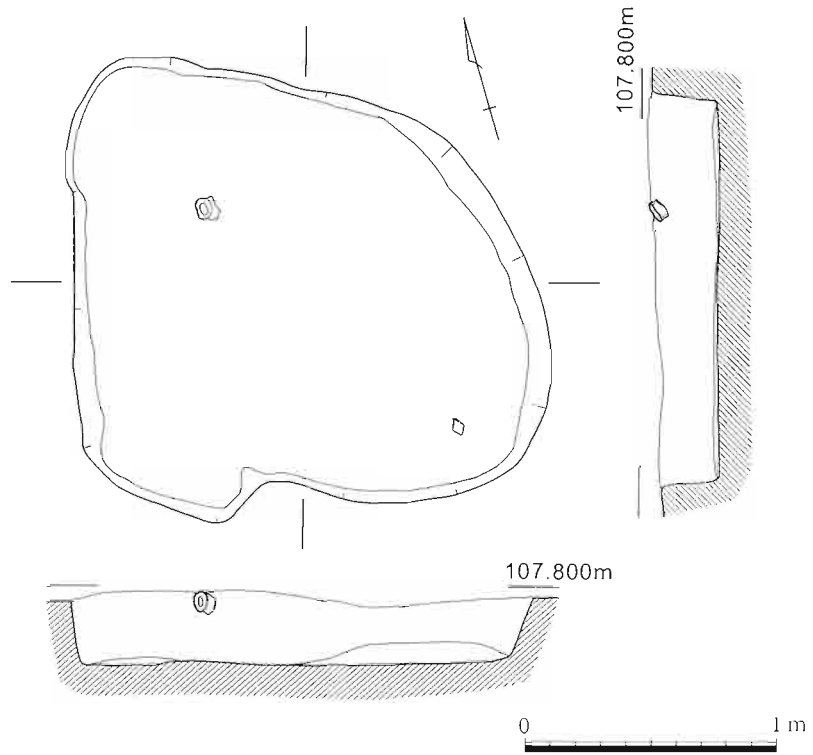
楕円形を呈する土坑である。規模は長軸0.55m、短軸0.38m、深さ80cmを測る。遺物は内外面にハ



第40図 2区6号土坑出土土器実測図(1/3)



第41図 2区7号土坑実測図(1/30)



第42図 2区8号土坑実測図(1/30)

ケ調整が残る土器片が出土している。埋土は1層。

11号土壙（第45図）

楕円形を呈する土壙である。規模は長軸1.23m、短軸0.64m、深さ10cm前後を測る。内外面にハケ調整が残る土器片などが出土している。埋土は1層。

出土遺物（第46図）

甕である。口縁部はゆるやかに外反する。底部はレンズ底である。内外面ともハケ調整。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内面が淡灰黄色、外面が黄白色。焼成は不良。

12号土壙（第47図）

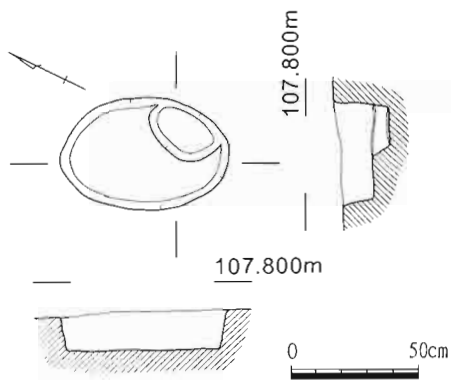
不定形な土壙である。規模は長軸1.75m、短軸1.35m、深さ15～20cmを測る。埋土は6層。

出土遺物（第48図）

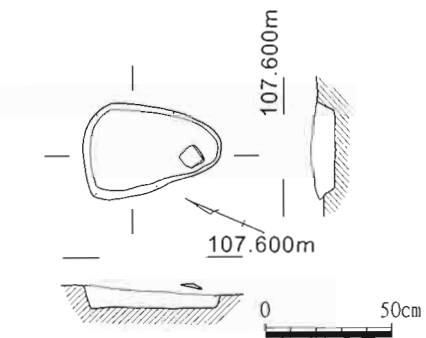
壺の底部で、平底をなす。底径9.9cm。内面へラミガキ。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内面が淡灰色、外面が淡黄白色。焼成は良好。

13号土壙（第49図）

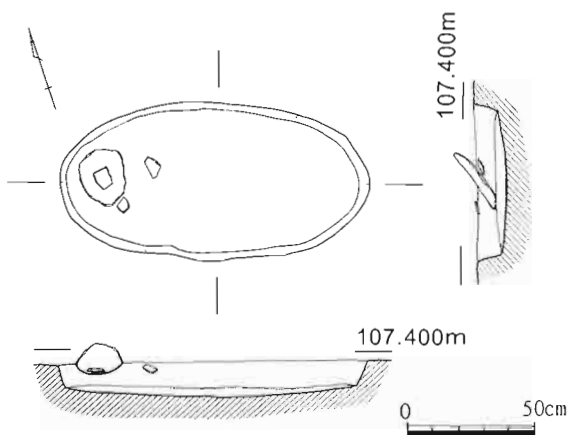
不定形な土壙である。床面は平坦でなく起伏にとんでいる。遺物は出土していないが、土壙中央部には炭が集中してみられた。規模は長軸0.93m、短軸0.75m、深さ10～24cmを測る。埋土は1層。



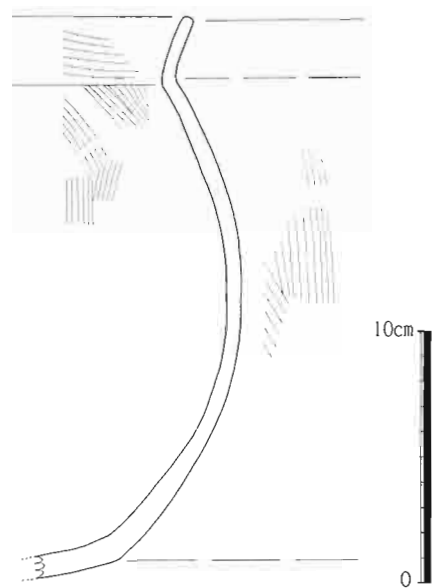
第43図 2区9号土壙実測図(1/30)



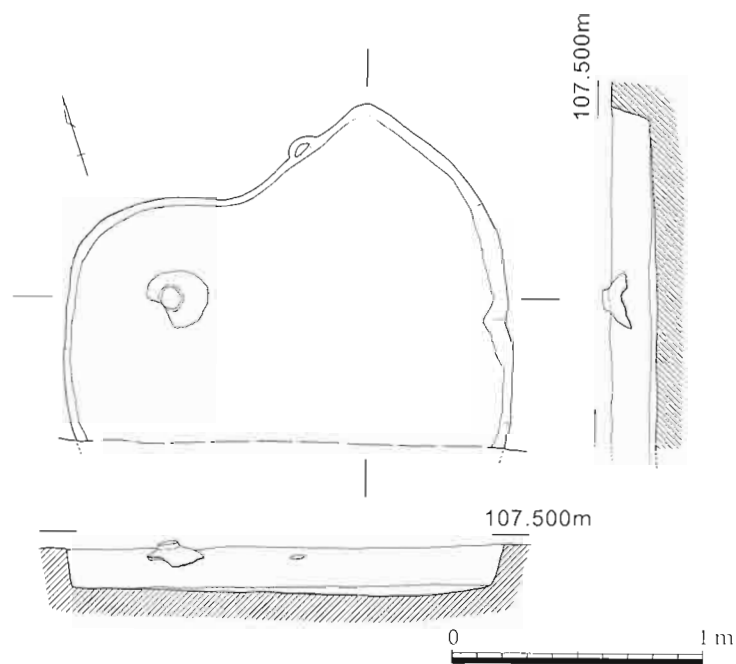
第44図 2区10号土壙実測図(1/30)



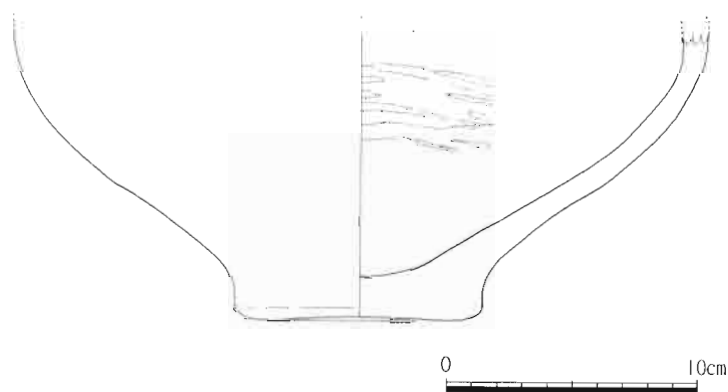
第45図 2区11号土壙実測図(1/30)



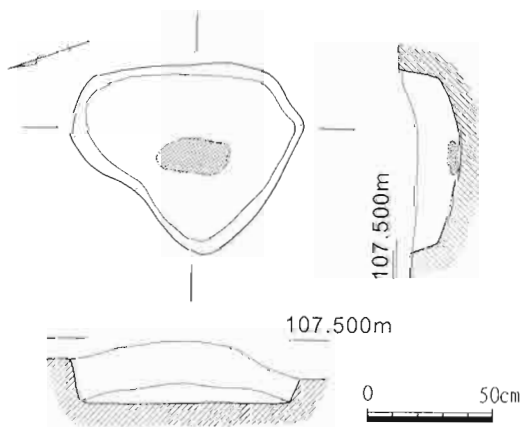
第46図 2区11号土壙出土土器(1/3)



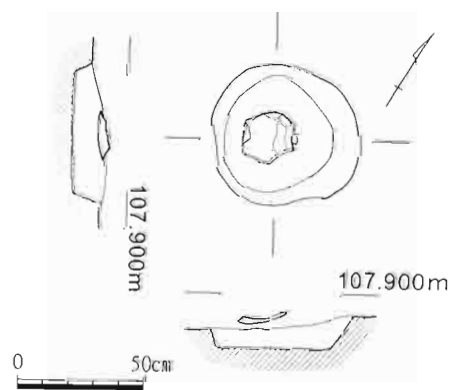
第47图 2区12号土坑实测图(1/30)



第48图 2区12号土坑出土土器实测图(1/3)



第49图 2区13号土坑实测图(1/30)



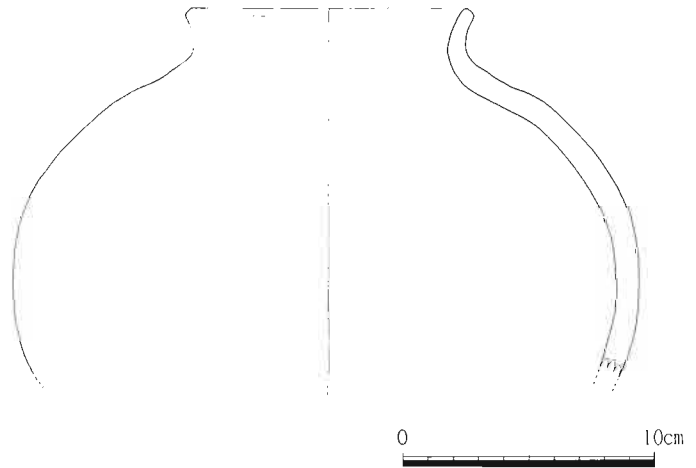
第50图 2区14号土坑实测图(1/30)

14号土壙 (第50図)

円形の土壙である。規模は長軸0.95m、短軸0.79m、深さ5cmを測る。埋土は6層。

出土遺物 (第51図)

壺である。胴部は球形をなし、短い口縁はわずかに外反する。口径11.5cm。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内面が淡褐色、外面が黄褐色。焼成良好。



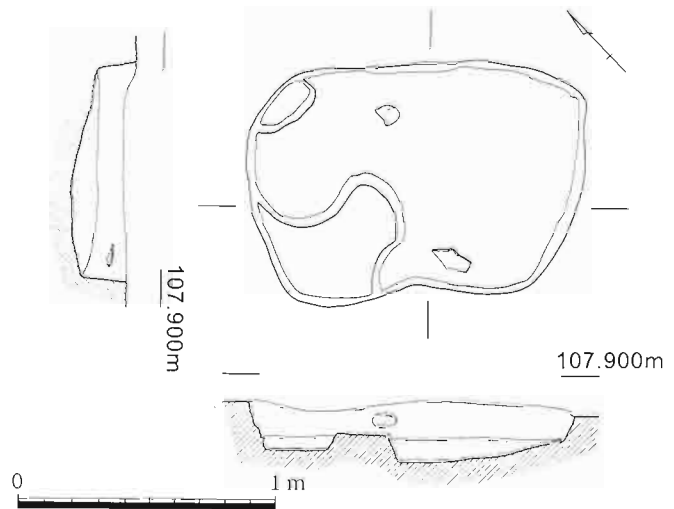
第51図 2区14号土壙出土土器(1/3)

15号土壙 (第52図)

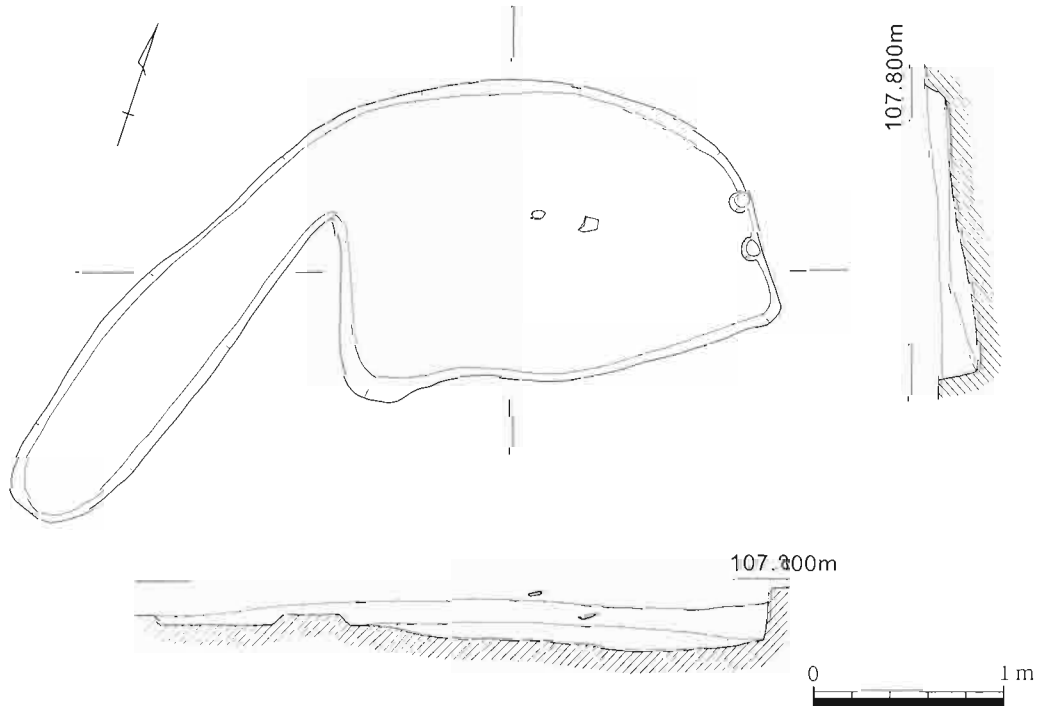
隅丸長方形を呈する土壙で、床面は2段掘りである。規模は長軸1.36m、短軸0.94m、深さ10~24cmを測る。河原石のほか、内外面にハケ調整が残る土器片が出土している。埋土は6層。

16号土壙 (第53図)

隅丸長方形を呈する土壙で、床面は2段掘りである。規模は長軸3.46m、短軸1.58m、深さ4~20cmを測る。遺物は土器片が出土している。埋土は6層。



第52図 2区15号土壙実測図(1/30)



第53図 2区16号土壙実測図(1/40)

17号土壙（第54図）

不定形な土壙で、中央に楕円形の堀込みがみられる。規模は長軸1.32m、短軸1.24m、深さ15～28cm前後である。遺物は出土していない。埋土は6層。

18号土壙（第55図）

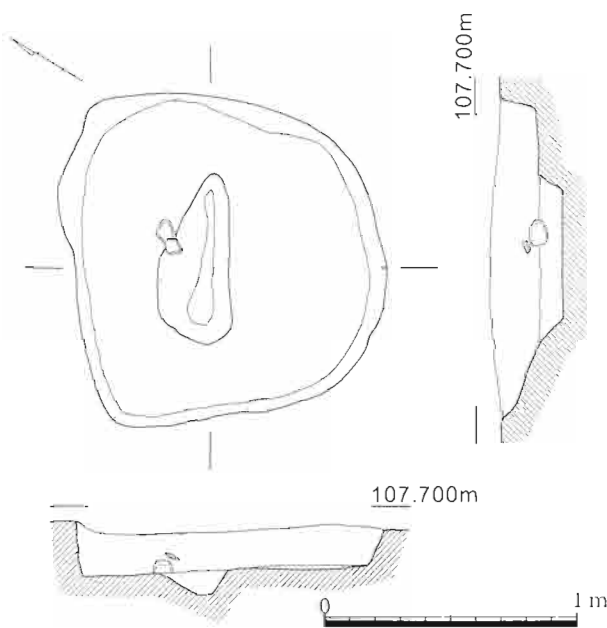
ほぼ円形をなす土壙で、内側に小ピットを伴う。規模は長軸0.94m、短軸0.82m、深さ12～40cmを測る。埋土は6層。

19号土壙（第56図）

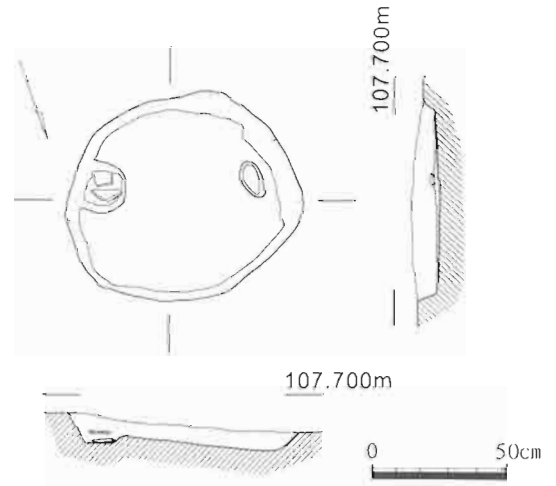
不定形な土壙で、床面は平坦でなく起伏がある。規模は長軸1.06m、短軸0.71～0.74m、深さ2～11cmを測る。埋土は6層。

出土遺物（第37図）

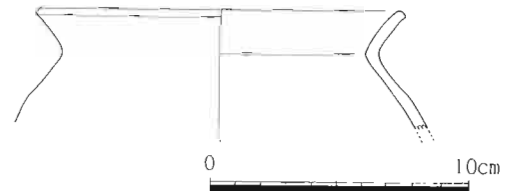
甕の口縁部である。口径14.7cm。調整不明。胎



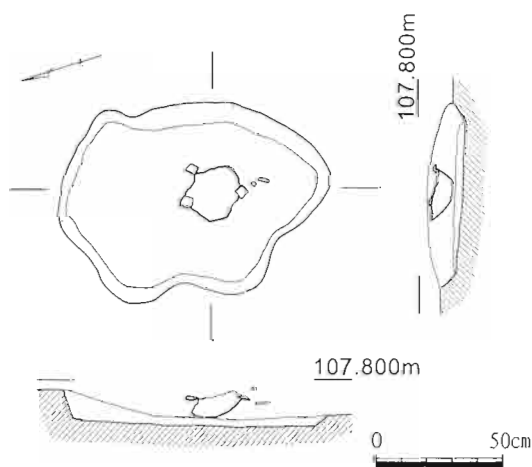
第54図 2区17号土壙実測図(1/30)



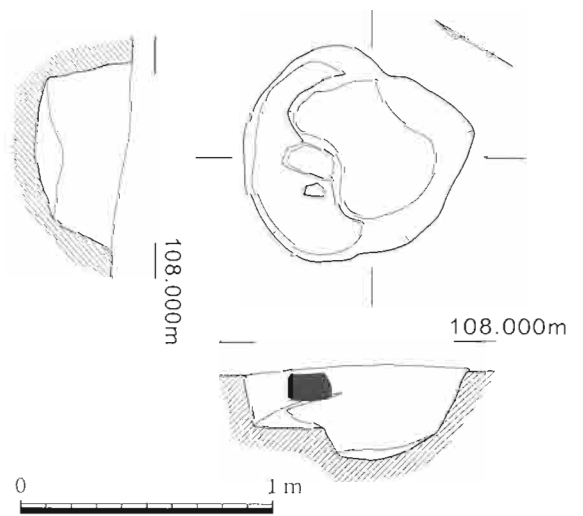
第55図 2区18号土壙実測図(1/30)



第57図 2区19号土壙出土土器実測図(1/3)

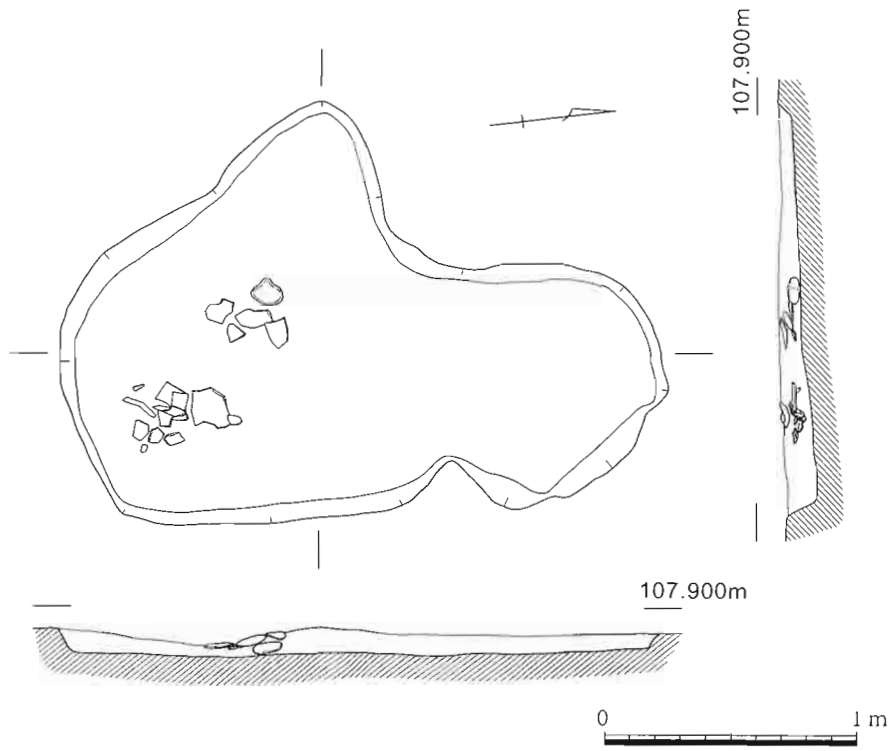


第56図 2区19号土壙実測図(1/30)

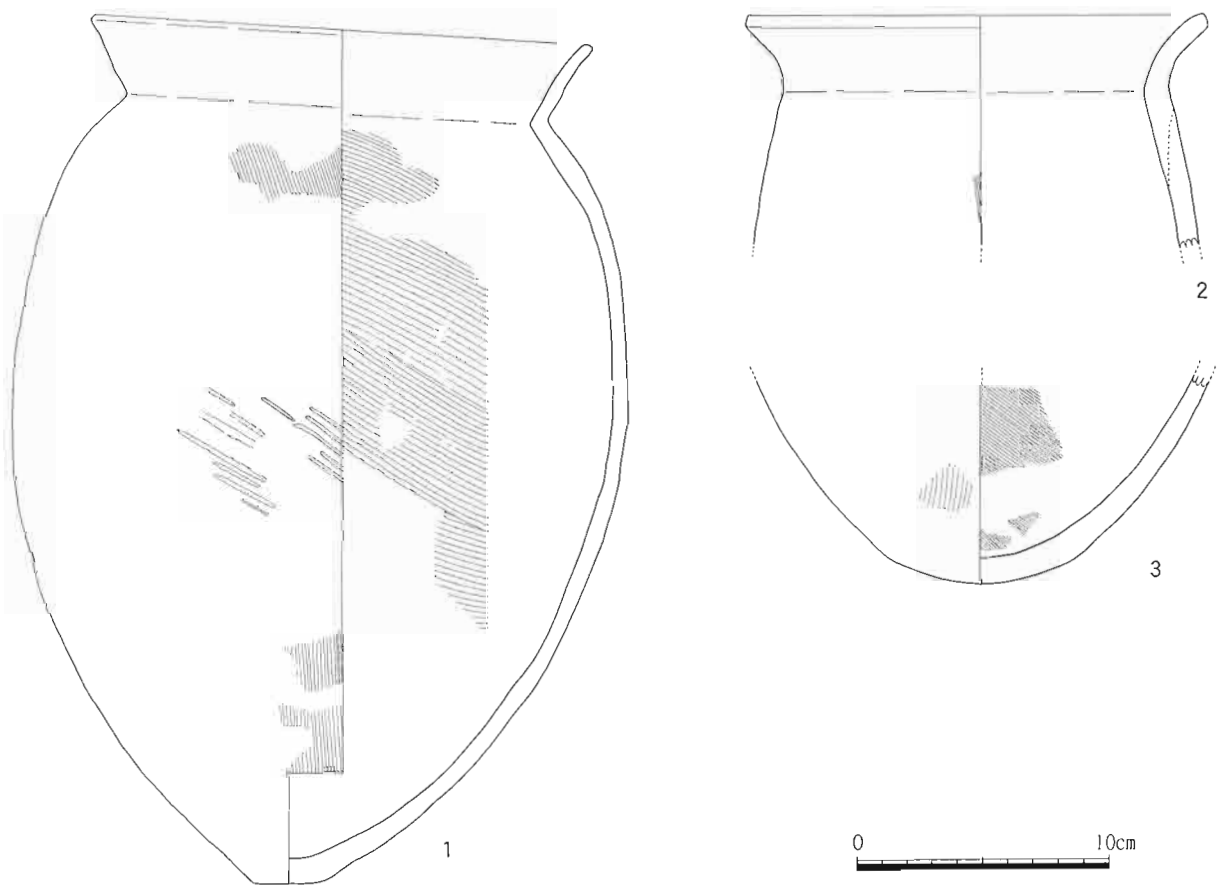


第58図 2区20号土壙実測図(1/30)





第59图 2区21号土壤实测图(1/30)



第60图 2区21号土壤出土土器实测图(1/3)

土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内外面とも淡灰褐色。焼成は良好。

#### 20号土壙 (第58図)

不定形を呈する土壙で、床面は2段掘りをなす。規模は長軸0.89m、短軸0.85m、深さ22~38cmを測る。遺物は内外面にハケ調整が残る土器片が出土している。埋土は6層。

#### 21号土壙 (第59図)

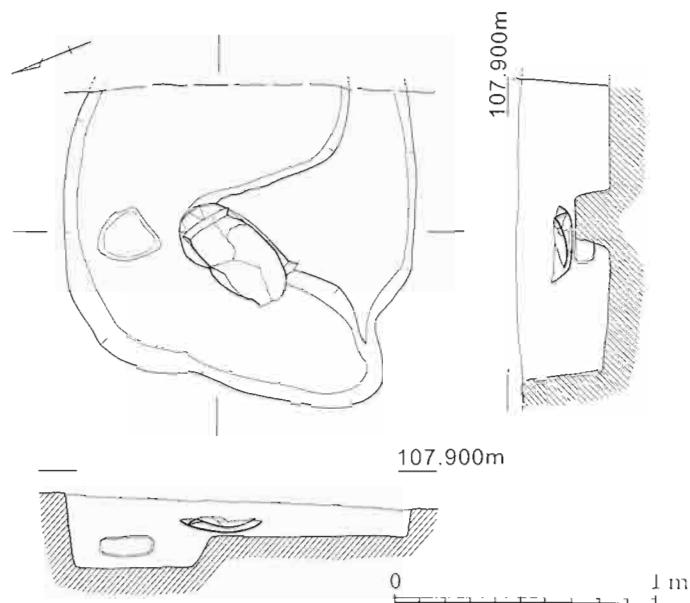
不定形を呈する土壙である。規模は長軸2.34m、短軸0.78~1.66m、深さ5~11cmを測る。埋土は1層。

#### 出土遺物 (第60図)

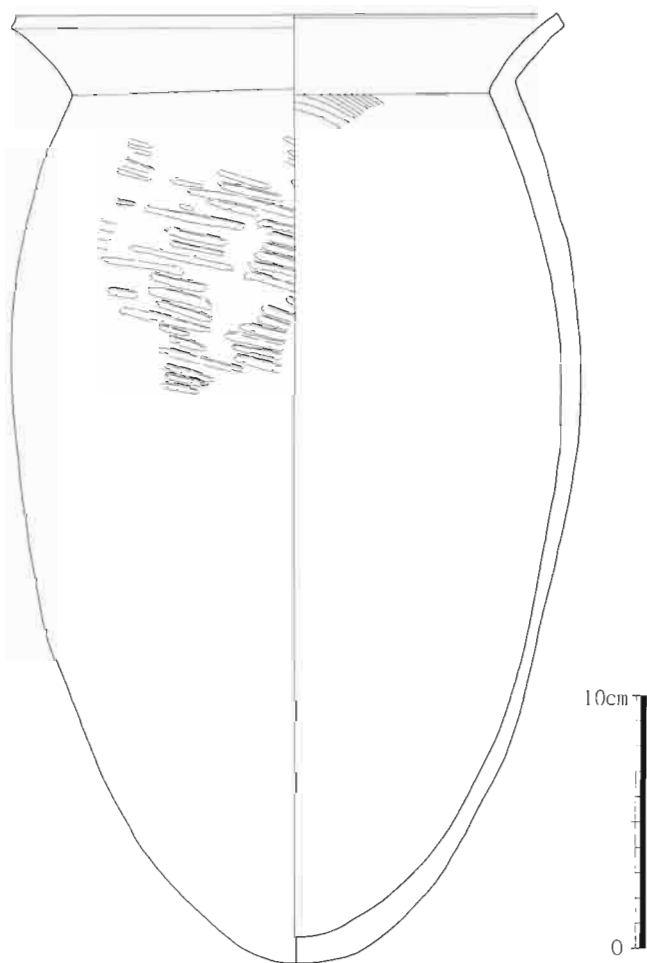
1は甕である。口縁は「く」字状を呈し、ほぼ直立気味にのびる。胴部は卵形で、丸みをもつ。底部は不安定なレンズ底。外面にススが付着。内面はハケ調整、外面は粗いタタキ後にハケ調整。口径19.9cm、器高34.5cm、底径2.9cm。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内面が暗灰茶褐色~黒褐色、外面が暗茶褐色~黒褐色。焼成は良好。2は甕の口縁である。口縁部は厚みがあり、「く」字状を呈し、外反する。胴部は内外面ともハケ調整。口径18.3cm。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内面が暗灰褐色、外面が黒褐色。焼成は良好。3は甕の底部で、ほぼ丸底に近い。内外面ともハケ調整が残る。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内面が赤褐色、外面が赤褐色~淡灰白色。焼成は良好。

#### 22号土壙 (第61図)

不定形な土壙で、床面は2段掘りをなす。遺物は第62図に図示した甕が出土した。この甕は、半裁した甕の口縁部を互い違いに重ねた状態で出土した。また、30cm程度の河原石も出土している。規模は長軸1.27m+ $\alpha$ 、短軸1.40m、



第61図 2区22号土壙実測図(1/30)



第62図 2区22号土壙出土土器実測図(1/3)

深さ10～35cmを測る。埋土は1層。

出土遺物（第62図）

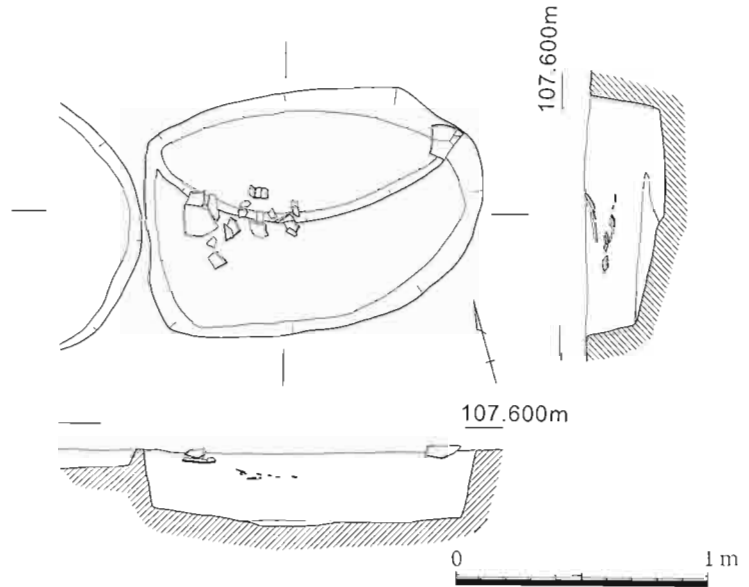
甕である。口縁は「く」字状を呈し、ほぼ直立気味にのびる。胴部は卵形をなし、底部は丸底である。内面はハケ後ナデ。頸部にハケが残る。外面は粗いタタキ後縦方向のケズリ。口径22.0cm、器高37.4cm、底径2.4cm。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内外面とも淡灰褐色。焼成は良好。

23号土壙（第63図）

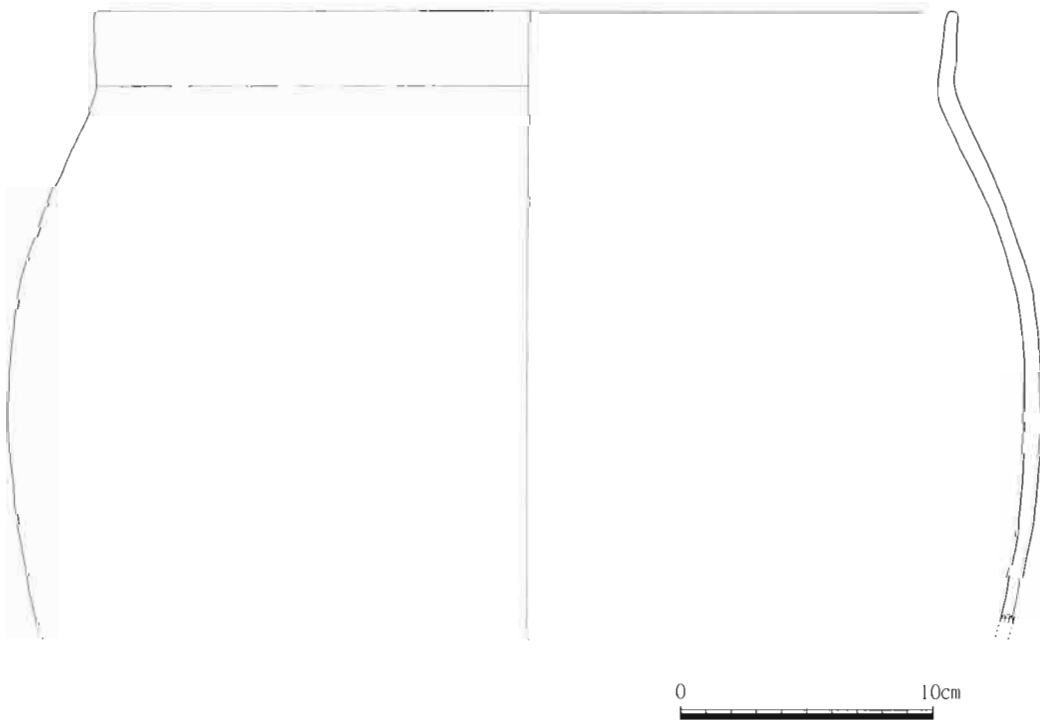
不定形な土壙で、床面は2段掘りをなす。床面より浮いた状態で遺物が出土した。規模は長軸1.34m、短軸0.97m、深さ19～32cmを測る。埋土は1層。

出土遺物（第64図）

壺である。口縁部は直線的に、ほぼ直立する。口径33.7cm。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内面が淡黒褐色、外面が淡褐色。焼成は良好。



第63図 2区23号土壙実測図(1/30)



第64図 2区23号土壙出土土器実測図(1/3)

#### 24号土壙（第65図）

調査区東側で検出した楕円形を呈す土壙である。規模は長軸0.89m、短軸0.72m、深さ12cmを測る。遺物は内外面にハケ調整が残る土器片などが出土している。埋土は1層。

#### 出土遺物（第66図）

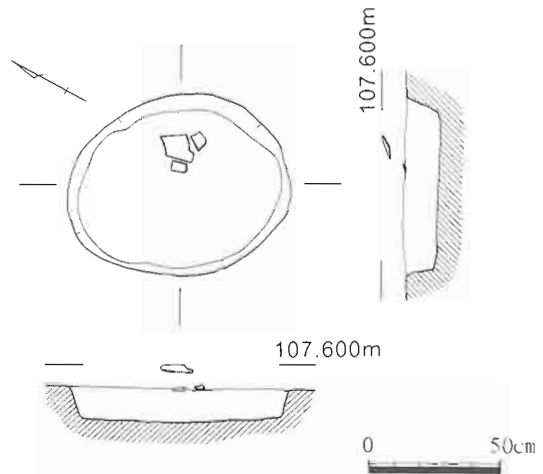
壺である。口縁は「く」字状に大きく外反する。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内外面とも淡灰褐色。焼成は良好。

#### 25号土壙（第67図）

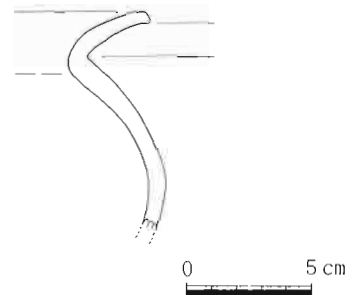
楕円形を呈する土壙である。床面は平坦でなく起伏がある。規模は長軸0.85m、短軸0.37m、深さ2～5cmを測る。遺物は土器の小片が出土している。埋土は1層。

#### 2区出土土器（第68図）

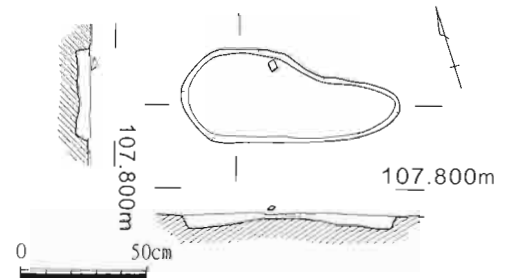
第68図1は精製の浅鉢である。口縁の立ち上がりは発達し、口縁端部は丸く仕上げ、外面に沈線（凹線）1条を施文する。頸部は内湾しながら、下位で湾曲し肩部で外面に稜をなして屈曲する。底部は欠損。頸部付近にススが付着。復元口径は29.2cm。色調は内外面とも黒茶褐色。23号土壙出土。2は甕である。口縁は「如意」状を呈する。口縁下には1条の沈線が巡る。口径34.3cm。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内面が淡黄白色、外面が暗茶黄色。焼成は良好。一括遺物である。3は片口の甕である。口縁部は直線的にほぼ立ち上がるが、その一部を「く」字状に大きく屈曲させ片口部とする。片口部は指押え。調整は内外面ともハケ仕上げ。口径13.8cm。胎土は角閃石、石英、長石を含む。色調は内外面とも淡灰褐色。焼成は良好。川砂層出土。4は土師器の坏である。底部は糸切り。口径12.5cm、器高3.3cm、底径6.6cm。色調は内面が淡褐色、外面が淡茶褐色。一括遺物である。



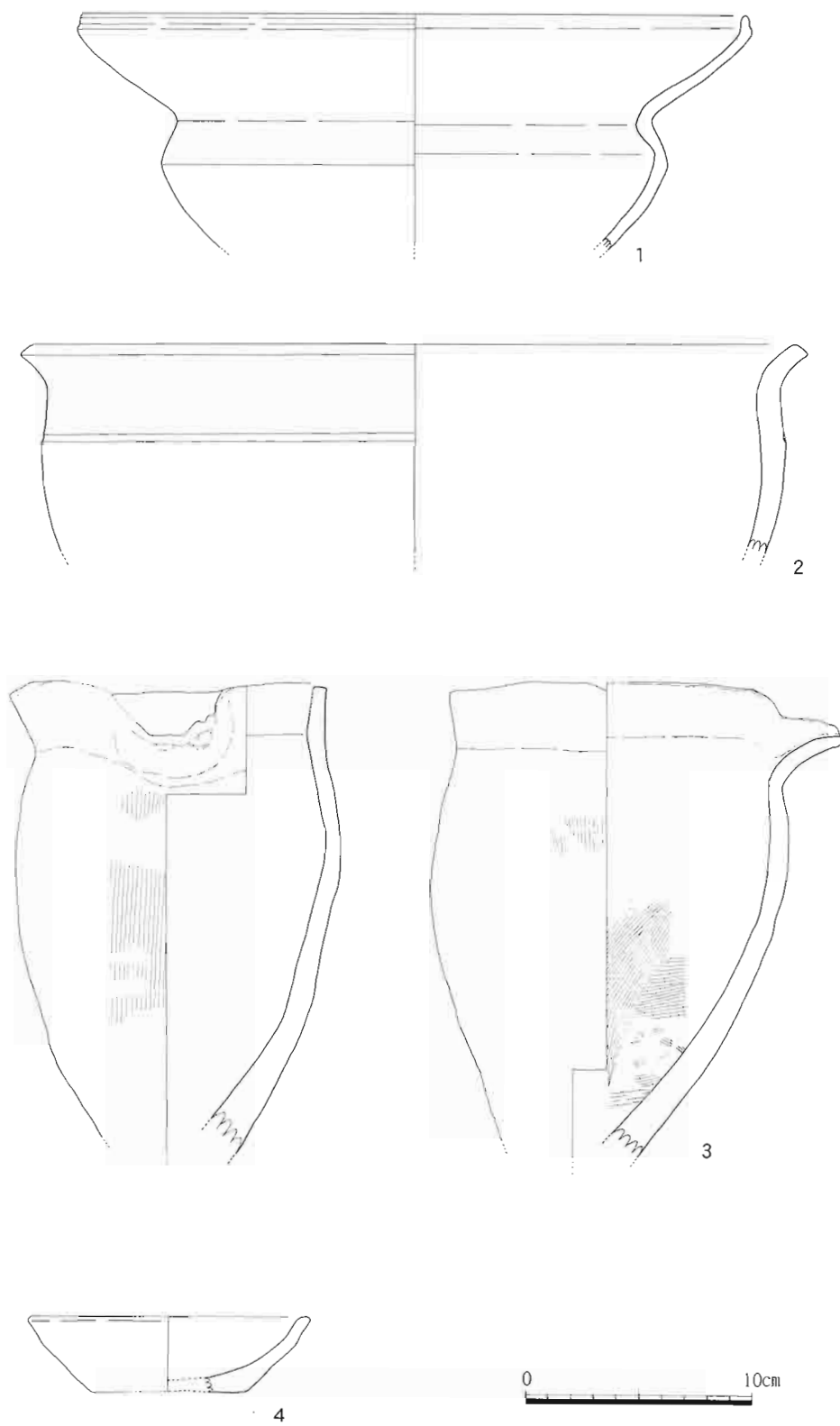
第65図 2区24号土壙実測図(1/30)



第66図 2区24号土壙出土土器実測図(1/3)



第67図 2区25号土壙実測図(1/30)



第68图 2区出土土器実測図(1/3)

## IV まとめ

今回の三和教田遺跡A地点1・2区で発掘された遺構のほとんどは総数117基を数える土壙で、そのうち主な41基の土壙を報告してきた。これら両区で発見された土壙群を総体的にまとめてみると、まずその平面形態には円形、楕円形、隅丸長方形、不定形などがあるが、全体的には不定形プランのものが目立っている。それらの規模は50cmから2mとまちまちで、床面も起伏にとんだものが多く、2段掘の土壙もかなり認められる。遺物の出土状況は、大半が破片での出土で完形品となり得る資料は少ない。こうしたなか、2区22号土壙のように1個体分の甕の半分を口縁部を互い違いにするように意図的な廃棄が行われていたものもある。出土した遺物については、甕や壺・鉢などの器種が認められるが高坏は見当たらない。土壙群は2つの調査区に限って見るならば、1区では南西隅や南東側、2区では北側中央から東側にかけてやや偏った分布を示しているといえる。

次に、これら土壙群の時期についてであるが、まず出土土器は弥生土器が数多く出土しており、2つの時期の土器群が存在する。1つは1区包含層出土の土器（第29図-1・2）が特徴となる。口縁部が逆「L」字形をなし、口縁下に沈線を巡らせ、上げ底の底部をなすことから城ノ越式に該当する。2区一括遺物の甕（第68図-2）も、如意形の口縁部ではあるが、口縁部が短く城ノ越式の範疇に含まれそうである。2区12号土壙出土の壺（第48図）についても同様で、これらは弥生時代中期初めに位置づけられる。

もう一つは、2区21・22号土壙出土の甕の完形品に代表される。前者は（第60図-1）は口縁部が直立し、胴部は卵形、底部は不安定なレンズ底で、後者は（第62図）は口縁部が外反し、胴部は倒立、底部は丸底である。甕の底部を見る限りではレンズ底をなすものもあり（第10図-2・第46図）、甕の外表面調整にはハケ仕上げが存在する。こうした特徴からこれらの土器群は弥生時代後期後半から終末期に位置付けられる。壺や鉢については明確な時期判断ができないが、外面調整にタタキが残っている2区1号土壙出土の鉢（第33図）や、口縁部が直立する壺が出土した2区23号土壙などはこの時期に含まれると考えられ、1区1・6・8・11・13・16号土壙や2区2・6・14・19・23・24号土壙なども該当しそうである。なお、2区19号土壙出土の甕（第57図）は外面調整ははっきりしないが器壁が薄く、肩が張る特徴から外来系の影響が見られる。

また、3号土壙からは白磁皿が出土している。外反する口縁部や胴部の傾き具合から、太宰府分類のⅢ-2に相当し、12C頃の所産と考えられる。このほか、遺構は確認されていないが縄文土器も出土している。23号土壙の流れ込みの浅鉢である。口縁部は長く外反し、端部は立ち上がり、その外面に沈線（凹線）1条を巡らせる特徴を有することから晩期前半代に位置づけられよう。

このように、土壙群の年代は弥生時代後期後半から終末のものが大半を占め、弥生時代中期初めや12C頃のものが散見される。

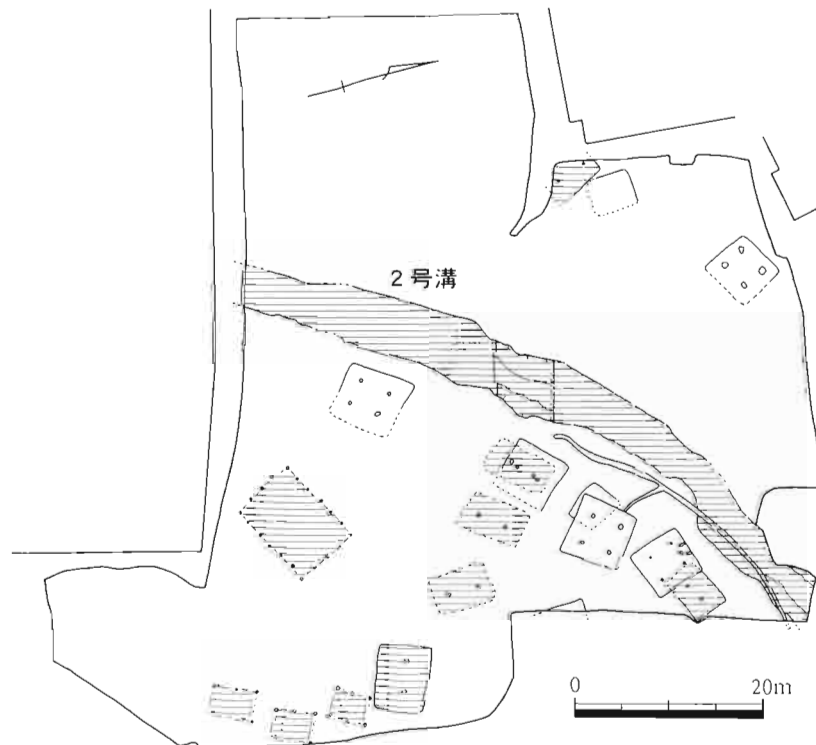
さて、これら土壙群であるが大半は地山のシルト層に掘り込まれたものである。土壙には深さの浅いものも見受けられ削平を受けたものも存在するが、土壙の埋土観察からすればあきらかに後世に掘削されたものを除くとシルト層を中心に掘られている。地元では近年まで良質なシルト層が存在することから瓦製作に使用するための採掘が行われていたと言う。市内のこれまでの調査事例からすればシルト層を基盤とした遺跡はなく、また弥生時代後期後半から終末の土壙が中心となっているわりには該期の竪穴住居や建物などの遺構が見られない。こうしたことを考えると、土壙群の一部はシルト（粘土）を採掘した痕跡とも推定される。市内にあっては、台地上での後迫遺跡にお

いてシルト（粘土）採掘坑と考えられる土壌が発見されている<sup>at2)</sup>。台地上での場合は赤土の下部でシルト層がみられるが、深い所では2 mを越える。その点、この遺跡では比較的浅い位置での採掘が可能である。断定はできず、この点は今後の周辺調査に期待するところが大きい。

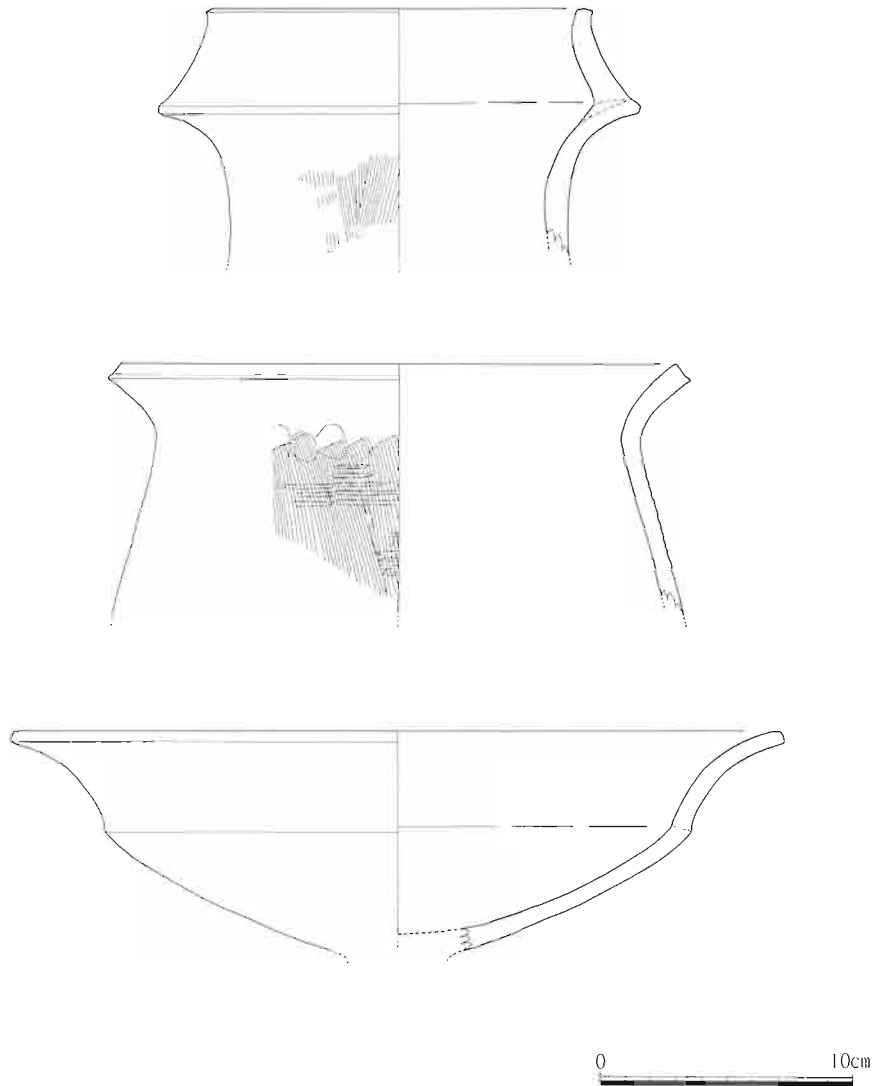
それでは、すでに簡単にまとめているB・C地点との関係とはいえば、まずB地点では環濠集落の存在が確認されている。第69図に示すとおり、弧状にのびる溝を中心とするもので、内部にあたると考えられる東側には、4間×6間の大型建物を中心に竪穴住居跡5棟+α、1間×2間の倉庫群3棟などが存在する、環濠は幅約5 m、深さ約2 mと規模は大きい。その時期は第70図のような土器が出土しており、存続時期は後期後半から終末に位置付けされる。これは、A地点の大半を占める土壌群の時期と符合するものである。

また、B地点では中世期の掘立柱建物も発見されている。明確な時期についてはB地点の本報告に譲るが、A地点の3号土坑とほぼ同じ時期と推定される。さらに、A地点では縄文時代晩期の土器が出土しているが、C地点<sup>at3)</sup>においても後期後半から晩期前半の資料がある。C地点では弥生時代中期初めの土壌も検出されており、時期的にはA地点の2区12号土壌と同時期とされる。このように、三和教田遺跡A地点での土壌群はB・C地点と同時期の遺構や遺物を認めることができる。

最後に、この3地点の調査成果からすると、共通してほぼ同時期の遺構が存在することがわかる。遺構の質や量においては、圧倒的にB地点に集中しており、これは一つに地形的にもB地点周辺が他に比べ盆地内を見渡すことのできる安定した高位に位置し、各時期における集落選定において最も適している場所であったことがあげられる。遺跡の中心であったことは間違いなさそうである。



第69図 三和教田遺跡B地点の弥生時代主要遺構図(1/800)



第70図 三和教田遺跡B地点の2号溝出土土器実測図(1 / 3)

C地点の発掘結果を見ると、C地点は三和教田遺跡のある「低位段丘1面」の南側先端部にあたると。 「低位段丘1面」はA・B地点よりさらに北西へと続いているが、蛇行する花月川と接しここでその地形は終わる。その距離約1kmに達する。A地点より北西側の調査を待たねばならないが、この「低位段丘1面」が三和教田遺跡の存在する範囲と推定され、そこには少なくとも旧石器・縄文時代後期～晩期・弥生時代中期・後期、古墳時代前・後期、中世の集落跡が営まれている。遺跡周辺を見渡してもこれだけの長期に存続する大規模な遺跡はなく、また盆地地形にあたって台地下での複合する時代の遺構が発掘された例は少ないことから、三和教田遺跡は盆地北部の花月川流域における中心的な遺跡の一つと言えそうである。

註1) 山本信夫編 『太宰府条坊跡Ⅱ』 太宰府市教育委員会 1983年

註2) 友岡信彦 「後迫遺跡」『大分県埋蔵文化財年報2』1992年度版 大分県教育委員会 1994年

註3) 平成6年度に日田市教育委員会が発掘調査を実施。

註4) 吉田博嗣編 『三和教田遺跡C地点』 大分県教育委員会 1997年



# 写真図版



1 区の航空写真



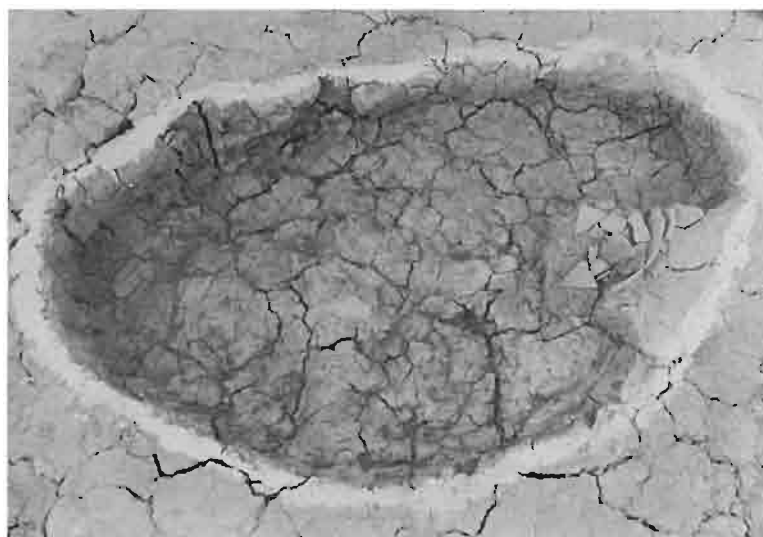
1 区の作業風景

図版 2

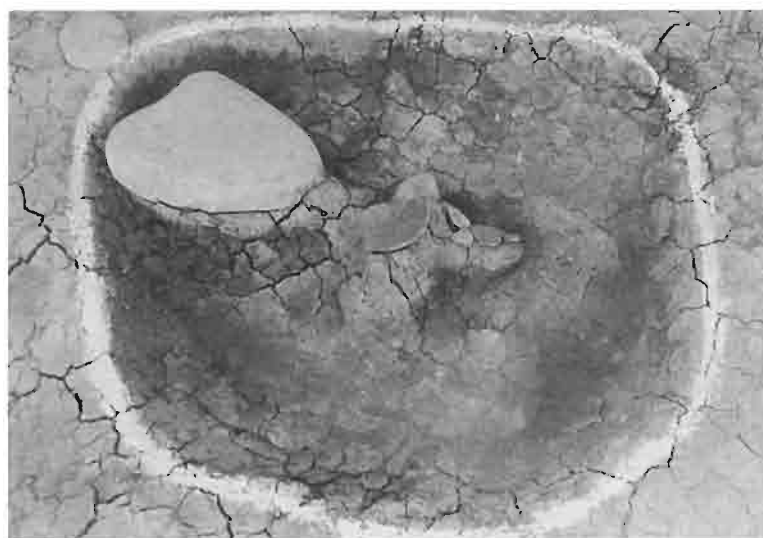
1区10号土壌の発掘状況



1区11号土壌の発掘状況



1区13号土壌の発掘状況





1



2



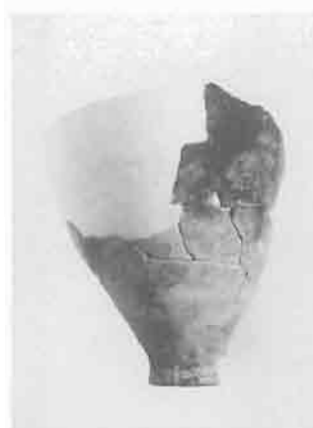
3



4



5



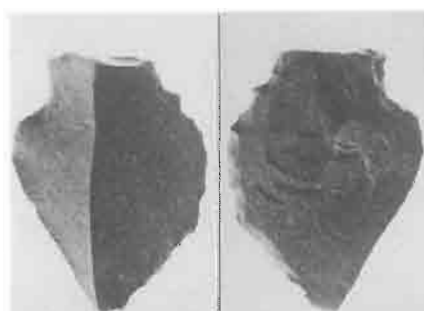
6



7



8



9



10

- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| 1. 1区6号土壙 (第14図)  | 6. 1区包含層 (第29図)  |
| 2. 1区8号土壙 (第17図)  | 7. 1区包含層 (第29図)  |
| 3. 1区11号土壙 (第21図) | 8. 1区包含層 (第29図)  |
| 4. 1区13号土壙 (第24図) | 9. 1区包含層 (第30図)  |
| 5. 1区16号土壙 (第28図) | 10. 1区一括品 (第30図) |

図版 4



2区の航空写真



2区の作業風景

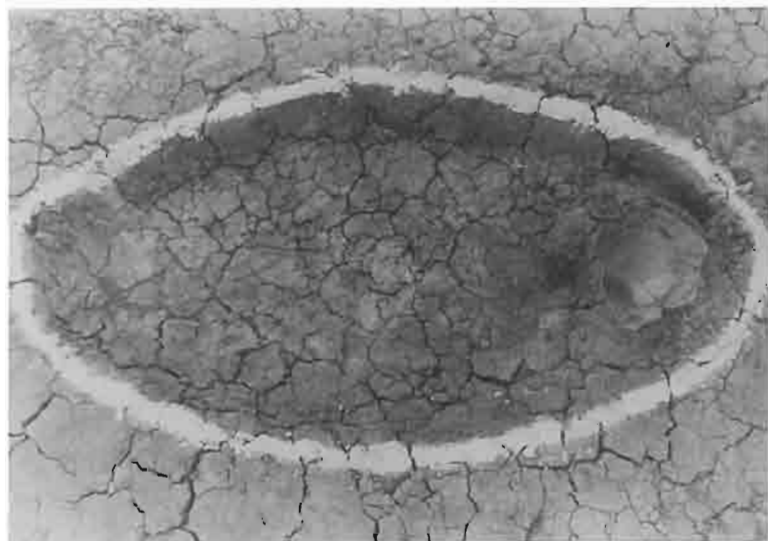
2区2号土壌の発掘状況



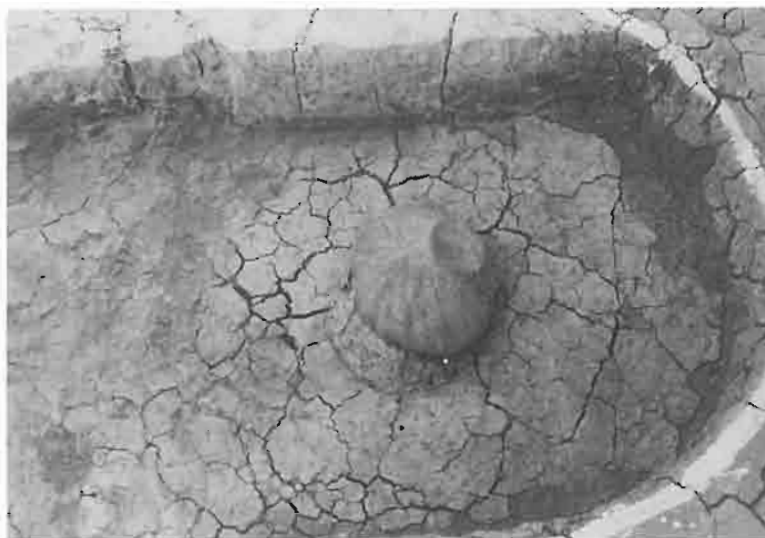
2区7号土壌の発掘状況



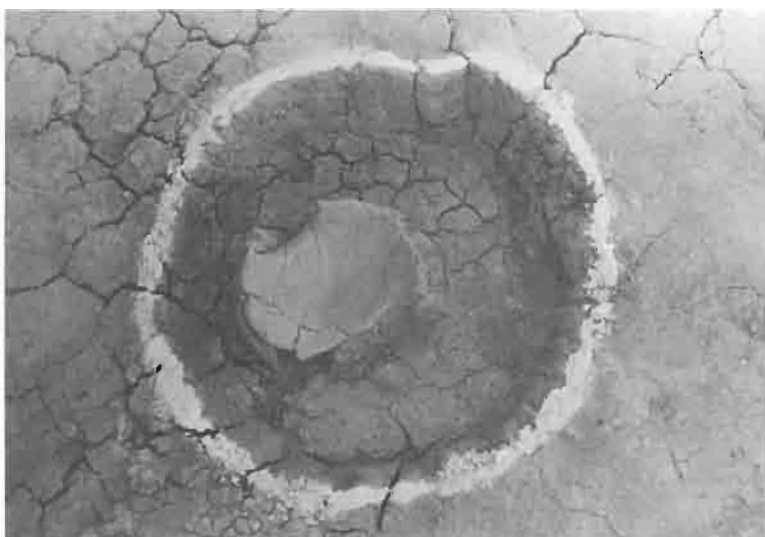
2区11号土壌の発掘状況



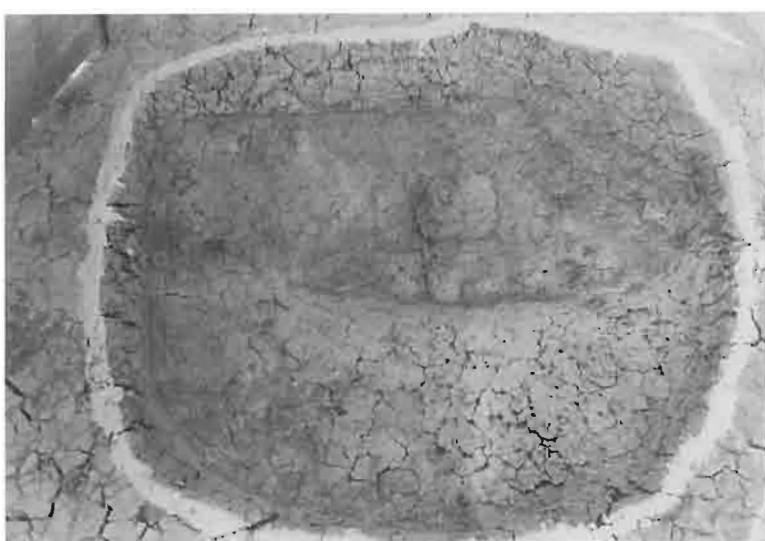
図版 6



2区12号土坑の発掘状況

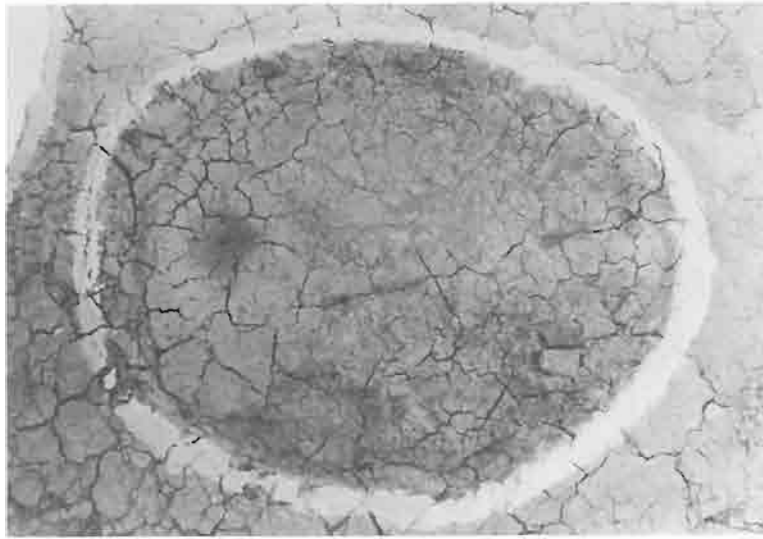


2区14号土坑の発掘状況

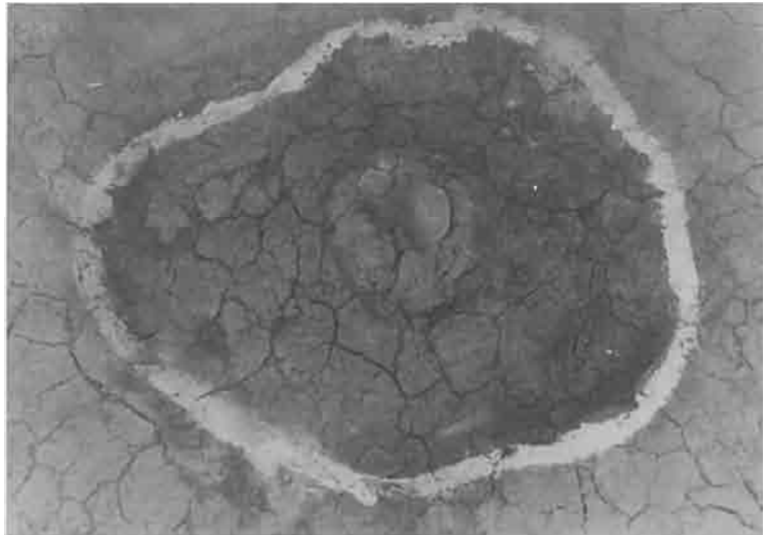


2区17号土坑の発掘状況

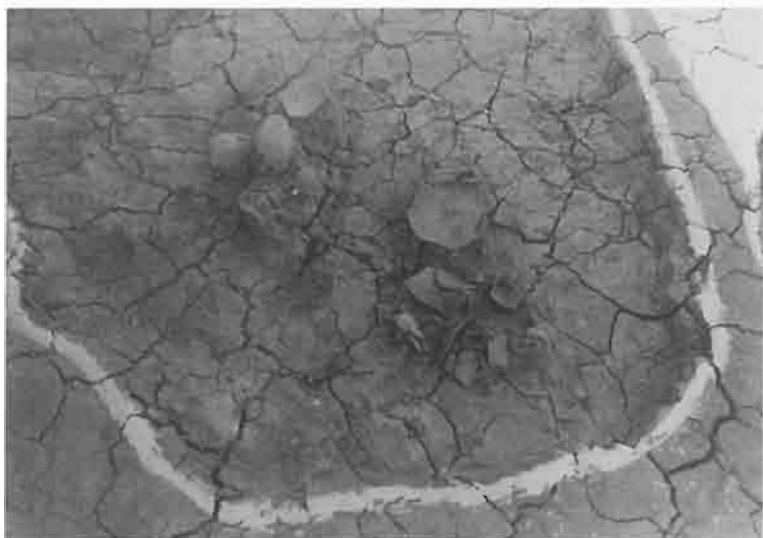
2区18号土壌の発掘状況



2区19号土壌の発掘状況



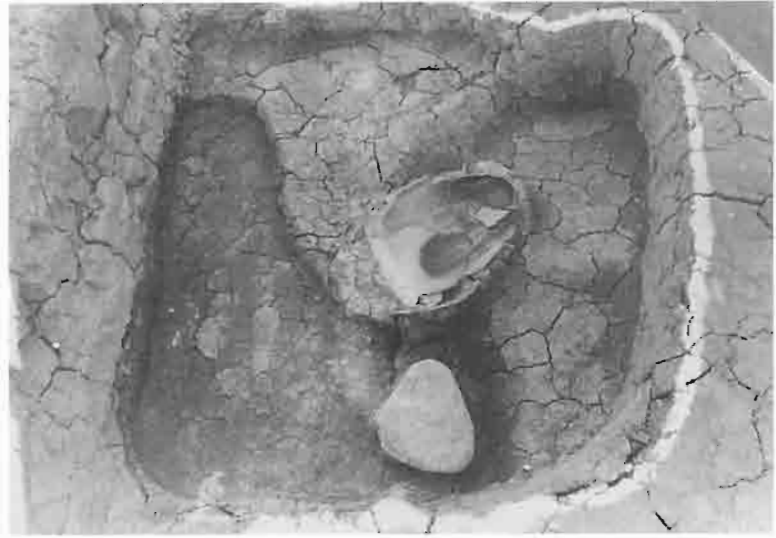
2区21号土壌の発掘状況



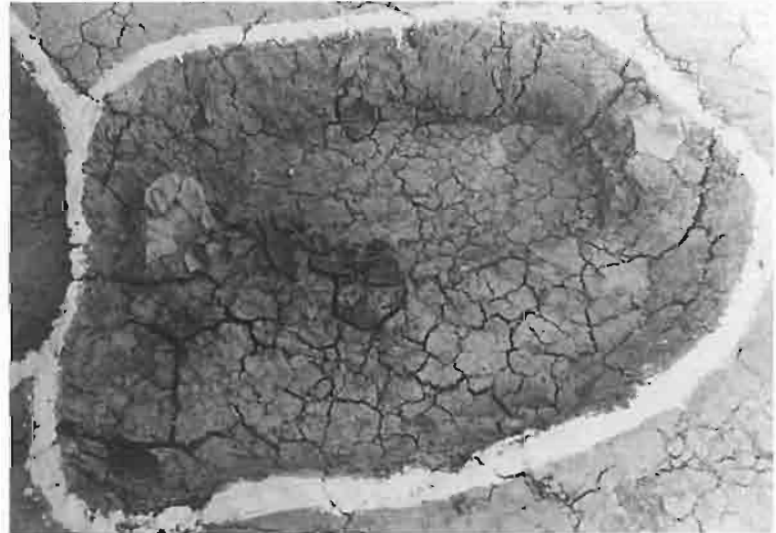


図版 8

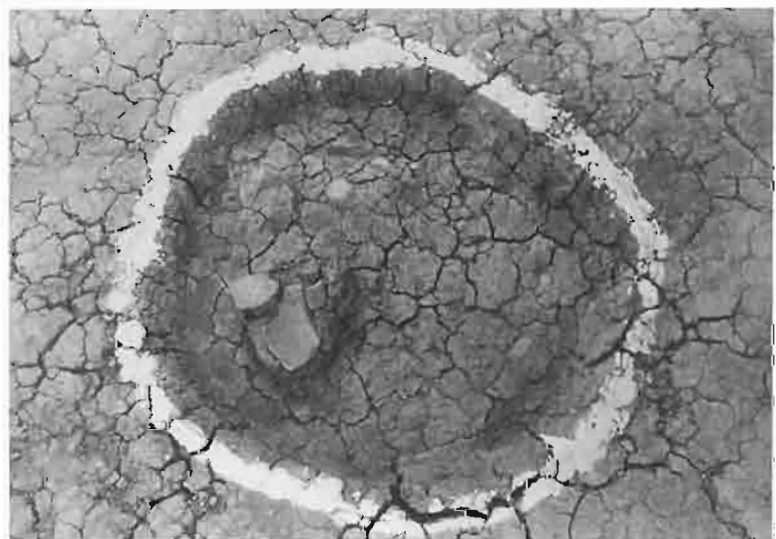
2区22号土壙の発掘状況



2区23号土壙の発掘状況



2区24号土壙の発掘状況





1



2



3



4



5



6



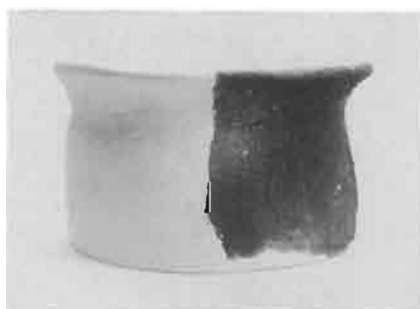
7



8



9



10



11

1~3. 2区2号土壙 (第35图)

4. 2区6号土壙 (第40图)

3. 2区11号土壙 (第46图)

4. 2区12号土壙 (第48图)

5. 2区14号土壙 (第51图)

8. 2区19号土壙 (第57图)

9~11. 2区21号土壙 (第60图)

図版10



12



13



14



15



16



17

12. 2区22号土壙（第62図）  
13. 2区23号土壙（第64図）  
14. 2区24号土壙（第66図）  
15~17. 2区川砂層（第68図）

# 報 告 書 抄 録

フリガナ	ミワキョウダイセキ (エーチテン)							
書名	三和教田遺跡 (A地点)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	土居和幸							
編集機関	日田市教育委員会							
所在地	〒877-0025 大分県日田市田島2丁目6-1							
発行年月日	1998年3月31日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
三和教田遺跡 (A地点)	大分県日田市 大字三和字教田					19950427 ~19950715	2.350㎡	住宅造成
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
三和教田遺跡 (A地点)		縄文時代 弥生時代 中世	土 壙 土 壙		縄文土器・石器 弥生土器 陶磁器			

三和教田遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告

第14集

平成10年3月31日

発行：日田市教育委員会

大分県日田市田島2丁目6-1

印刷：有限会社 朝日堂印刷

